
ぐうたら魔法少女伝説来海えりかちゃん

イマジンカイザー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぐうたら魔法少女伝説来海えりかちゃん

【Nコード】

N5544Q

【作者名】

イマジンカイザー

【あらすじ】

「ハートキャッチプリキュア！」において、もしも”主人公が来海えりかだったら？”というアイデアだけで書き始めたノリとその場の雰囲気だけで書いた悪ふざけ全開な完全不定期二次創作です。

キャラクタの性格付けや構成その他にはあまり力を入れていないのであしからず。

#1 プリキュア！あたし！？（前書き）

・本小説は「ハートキャッチプリキュア！」において、花咲つぼみではなく、「来海えりか」を主人公にしたらどうなるか？」を自分なりに考えて制作した二次創作です。

・私的にTwitter上で書いた文章をここでのフォーマットに落とし込んでいるだけなので、文章としてはかなり読みにくい部分があるかもしれません。

・『とりあえずなんでもいいから馬鹿をやるっ』というコンセプトに基づいて書いているので、キャラクターの再現度や反映度は著しく低くなっていることをお許しく下さい。

・なお、完全に思いつきでやっているので、更新頻度は最初から不定期です。

いつ終わるかいつ続きを書くかすらも不定期です。

#1 プリキュア！あたし！？

私、花咲つぼみ！ 砂漠の使徒と戦い、みんなの心の花を護る伝説の戦士プリキュアにあこがれて、幼いころから鍛錬を続けてきた”普通”の中学二年生の女の子です！

今日は私の祖母であり、最強のプリキュア『キュアフラワ―』だった薫子おばあちゃんから、とても大事な話があると聞いて鎌倉の実家から遠路はるばる希望ヶ丘までやってきました。

「よく来たわねつぼみ。今日の鍛錬はもう済ませた？」

「腹筋背筋腕立て伏せ百五十回二セット、ここまでもお父さんたちの車に頼らず、ランニングで来ました！ ばっちりです」

「そう……。今日あなたをここに呼んだのは、”プリキュアの力を受け継いで欲しいから”なの」

「私が……プリキュアに！」

”プリキュア”。とってもかわいいお洋服を着て、こころの大樹を枯らすとする悪魔のような『砂漠の使徒』と戦う戦士。子どものころからずっとずっと憧れてきたプリキュア。ついに、ついに私が、プリキュアに……！！

「でも、なんで急に？ 今まで”まだ早い”って言うてやらせてくれなかったのに」

「あなたも知つての通り、プリキュアと砂漠の使徒との戦いは数世紀前から続いていて、未だに終わる気配がないの。私も昔は最強のプリキュアなんて言われていたけど寄る年波には勝てず、素質ある女の子にその座を譲ったわ」

「知っています。”キュアムーンライト”。月影ゆりさん………でしたよね」

「ええ。キュアムーンライトはそれはもう強かったわ。砂漠の使徒もこれで殲滅できるかもしれない、そう思っていたのだけれど……

彼女も今年で高校三年生。一流の大学に入学するための猛勉強のためにプリキュアの座を降りてしまったのよ」

「それで……私がプリキュアに？」

「ええ。あなたのパートナーとなる妖精は明日の朝ここに来るわ。小さなころからずっとプリキュアになるべく頑張ってきたあなたならきつと……、私やムーンライトよりも強いプリキュアになれる。信じてるわ、つばみ」

「任せてください！ 砂漠の使徒は私が倒して見せます！」

不安はあるけど……それ以上に期待と使命の重さに胸がきゅゅつと絞めつけられてしまいますっ。

あああ、早く明日にならないかなあ。

あくる日の朝。希望ヶ丘の閑静な住宅街にて、イチゴジャムが塗られたトーストを啜えひた走る女の子が一人。

ウェーブのかかった青色のセミロングヘアが目を引く、小学生と見紛うほどに小柄な中学二年生の少女、来海^{くろみ}えりかだ。

「ああ〜もうっ。ちこくちこく〜！ なんでママも姉も起こしてくれないのよー」

トーストを口の中に押し込んで、一心不乱に走り続けるえりか。時間は既に八時半近く、ホームルーム開始まで時間の猶予はほとんどない。

いつそのことあきらめてしまいたいところだが、学校はなんとか目視できる位置にあり、全力疾走すればなんとか間に合う距離にあるものだから始末が悪い。えりかは布団の心地良さと起こしてくれなかった母親や姉を呪いながら通り慣れた道を駆けて行った。

そんなえりかを、空中を風船のようにふわふわと浮きながら追って行く一つの影があった。

「さあーと、プリキュアになるっていう女の子はどこですー？

お寝坊しちゃったせいでそんな子は全然見当たらないです！……、
あつ、きつとあの子ですつ！ ちよつと待ってくださいですー」

白地の体に所々緑色のハートの模様があしらわれた謎の生物は、
学校へとひた走るえりかの肩をぽんぽんと叩く。急いでいるので無
視しようとするえりかだが、あまりのしつこさに無視し切れなくな
り、一旦足を止めて不機嫌そうな顔で振り返った。

「なあに……つて、うそつ！ 何あれ何これ！ ぬ、ぬぬ……ぬい
ぐるみがしゃべったつ！？」

「待っていたですつ。あなたが伝説の戦士”プリキュア”になるた
めに修行を積んだ女の子ですねつ。 ああ、おっしゃらなくても結
構。そうです、そうに違いないのですつ！」

「ぷりきゅあ？ なにそれ。チューリップの仲間かなにか？」

「ボクの名前は”コフレ”。細かいことは後で説明するですつ。と
にかく、このココロパフォームを受け取るですつ！ 今日からあな
たはプリティでキュアキュアな超戦士、プリキュアになるですつ！
」

「なんだかよくわからないけど、くれるんならありがたあくもらう
よ、さんきゅー。こーゆー香水欲しかったんだー」

掌に収まるほどの大きさの香水を授けられ喜ぶえりか。彼女の態
度にコフレは”これがプリキュアになるべく修業を重ねてきた少女
なのか”と疑問を覚えるが、だからこそ器の大きい人物なのだと解
釈し、うんうんと一人で頷いた。

ベンキョーナンテイヤダー！ モットモットアソンデタイ
ンダー！

「んん？ なんだろ、この悲鳴……」

「これは！ もしや……」

彼女たちの視線の外で人々の逃げ惑う声と不気味な叫びがこだま
する。何があつたかと音のする方向に目を向けると、赤い頭に黄色
の目、両腕に鋭い爪を伸ばした黄色い胴体、緑色の足をした怪物が
街を襲っているではないか。

「うわおう！？ なにあの頭がタカで、体がトラでっ、足がバツタの化け物ッ！」

「このころの花を奪われて、何かと融合させられた魔物”デザトリアン”ですっ。さあさっ、『ココロパフォーム』を使ってプリキュアに変身するですっ」

コフレは先程の香水を指してえりかに変身するよう急かすが、当の本人は街を壊すデザトリアンの姿に怯え、体を震わせて立ち竦んでいる。

「いやっ、いやいやっ！ 無理でしょ無理だよあんなの！ 常識で考えて」

「何を言ってるですっ！ あの化け物はプリキュアにしか浄化できないんですっ。拳銃もロケットパンチもにゅーくりあうえぼんも、デザトリアンの前では無意味なんですっ！」

「ニュークリアウエポンつてずいぶん難しい言葉知ってるんだねえー……、じゃなくて！ そんな化け物、なおさらあたしにどうにかできるわけないっしょ！ 悪いけど他を当たってよ他」

「ああもう！ なんでもいいから変身するですっ！」
「ちょよ！？ ちょよちょよ……」

えりかの弱腰な態度にしびれを切らしたコフレは、彼女の手からパフォームを奪い取って、青色のこのころの種をセットし、有無を言わずえりかの体に吹き付けた。

髪の毛は膝近くまで伸びて水色になり、頭頂部には青色のティアラのようなリボン飾りがつき、足には白いオーバーニーソックスの上にショートブーツを履き、来海えりかは花びらを模ったドレスを身に纏った、”海”のプリキュアへと姿を変えた。

「おおーっ！ 何このチョーおしゃれな服！ 可愛さ抜群超めちゃモテじゃん！」

「これがプリキュアの戦闘服ですっ！ さあっ、名前を決めてデザトリアンをちょよいっつとやっつけちゃうですっ」

名前を決めてほしいと迫るコフレの言葉も届いているのかいない

のか。愛らしいプリキュアの衣装に狂喜乱舞するえりか。

とはいえ、さすがにうつとおしくなってきたからか、えりかは仕方ないかと親指と人差し指の間に顎を載せて思案を巡らせた。

「名前、名前ねえ……。じゃあ、光の使者キュアブラック！ もしくはホワイト」

「既に使われているので却下ですっ。っていつかその衣装でなんで白だの黒だのの発想が出るですっ？」

「だったらこの服青いし……。知性の青き泉！ キュアアクア！」

「それも使われてるですっ」

「ええーっ!? っていうかプリキュアってのはあたしだけじゃないのぉ? ちょっとやる気なくしたんだけど。じゃあねえ……。摘

みたてフレッシュ！ キュアベリー！」

「却下ですっ」

名前を決めると言われて精一杯考えたのに、その全てを却下されて立腹するえりか。しかしそれと同時に彼女は気付く。こんなことをしている場合ではないと。

「ってかさ、あの化け物街の方に向かってるよ? いいの?」

「あうあ！ これは一大事ですっ！ 先にあのデザトリアンを止めるですっ」

「名前は? 決めなきゃいけないんじゃないの?」

「うむむ……。! だったらマリリン!”キュアマリン”でいいですっ」

「結局あんたが決めんの!? ってかそう言った意味は」

「視界に海があつたからですっ。他に理由はないです」

「適当だなあもう！」

「細かいことは気にしないでほしいですっ! さあっ、行くですっ」

えりか、改めキュアマリンはコフレの後押しに従い、暴れるデザトリアンを討伐すべく街中へと跳んだ。ホームルーム開始を告げる学校のチャイムが鳴り響いたことを知らぬままに。

コフレに後押しされ一軒家の屋根を伝い、文字通り飛び跳ねて進んで行くキュアマリン。

羽のように軽やかな自分の体に驚き、眼下に映る街の様子を見下ろして子どものようににはしゃいでいた。

「うわっ、すっごー！ これならさっこれならさっ、十五階建てのビルもひとつ跳びできるんじゃないのー？」

「もっちろん、プリキュアだから当然ですっ。ちなみにパンチは厚さ3mの鉄扉をぶち破り、最高速度は新幹線よりも早いです。早いのですっ」

「もうそれ人間じゃないねー。でも面白いよ！ 大好き！ 超サイコー！」

人外の力の酔い痴れ、小躍りしながら空をスパイダーマンのように跳ね行くキュアマリン。街の人々からスカートの下が丸見えなのだが、彼女はその下にスパッツを履いているので問題はない。

そうこうしているうちに彼女たちは騒ぎの中心、デザトリアンが暴れ回る現場へと辿り着いた。

周辺の雑居ビルよりも一回り大きく、奇声を発して暴れ回るデザトリアンの姿に、マリンは思わずたじろいでしまう。

「でかいねえ……で、どうすりゃいいのこいつ」

「パンチにキック、投げ技絞め技で弱らせて、相手が抵抗できなくなったらところを必殺技でキメるですっ」

「この服でそんなことするの？ ちょっと抵抗あるんだけど……。つてかあなた、見た目に寄らずえげつないねー」

「何か言っただですか？」

「べつにー。まあやれっっていうんならやるよ。さあてー！ こいこいこいこいこいばっけものおー！」

大声で威嚇してデザトリアンを引き付け、マリンは相手が反応するよりも早く握り拳を振るって尻餅をつかせる。

「よっしゃよっしゃ、バンバンいくよーっ！」

マリンの猛攻は止まらない。立ち上がるうとするデザトリアンの腹に凝縮されたエネルギー弾を放つてよろめかせ、それならばと土煙に紛れて放たれた蹴りを十字に組んだ腕で凌ぎ、

そうして吹き飛ばされた反動を利用し、衝撃波が生じる飛び蹴りを放つて地面にめり込ませ、立ち上がれなくなった所で、デザトリアンの体を頭から持ち上げブレンバスターを見舞い、相手の動きを完全に止めた。

「よおし、だいぶ弱ってきた。それで、この後はどうするの？ モンスターボールでも投げるの？」

「今こそ超・必殺技ですっ！」 集まれ、花のパワー」と叫んで「フラワータクト」、あぁいや、”マリンタクト”を取り出すですっ！ キュアマリン」

「なんだかよく分からないけど、集まれ花のパワー！ マリン、タクトッ」

コフレの言葉に応じ、ハートをあしらった胸のリボンの前に手を当てるマリン。瞬間、当てた手の中にタクトのような武器が現れて彼女の掌に収まった。

「そうそう。そうしたら……」

っしやー、必いいい殺あああっ！ マリン、ダイナミ
イイイイックー！

その上で”デザトリアンを浄化してほしい”と伝えようとしたコフレだったが、マリンはあるうことか、浄化に用いるべき力をタクトの穂先に集中させて斬れ味を高め、そのままデザトリアンを真正面から叩き斬った。

これにはデザトリアンではなく、必殺技を撃てと言ったコフレ当人が声を上げた。

「ほわちゃー！？ なんてことするですう！ こころの花がッ、こころの花がああ」

「何驚いてるのさ。これってアレでしょ？ 何でも斬れるスーパー

剣みたいなのでしょ？ 夏祭りの露店で売ってる奴みたいなの。ってかさ、そもそも『こころの花』って何？ 造花かなにかのこと？

「人間ひとりひとりに咲いている聖なる花のことですっ。これと人が分離されるとその人は一生水晶玉の中から出られなくなってしまうんですっ！ なんてことをするですかマリリン！」

驚き叫ぶコフレの声に応じ、頭から股の先まで真っ二つに割れたデザトリアンを見降ろすマリリン。

よく見ると怪物の胸の部分に”中に花が綴じ込められた”角柱型の結晶のようなものが埋まっているのが目に見えた。花の知識の乏しいマリリンにはそれが何だが分からないのだが、コフレの慌てようと、近くに転がっている紫色の水晶玉を見込んだことで、その話が事実であると認識。

事態の重大さをようやく飲み込めたマリリンは、目を見開き冷や汗をたらだらと流してコフレに詰め寄った。

「マジっ！？ なんでそういうことを早く説明しないのよ！」

「こんな親の敵みたいにデザトリアンをぶった斬るプリキュアなんて予想できるわけないですっ！ 非常識にも程がありますっ！」

「そんなあ……。あわわわどうしよお、あたしこの歳で犯罪者になっちゃうよお……」

困惑し切ったマリリンはデザトリアンの体中から、件の結晶を引き抜いてまじまじと見つめる。

雑居ビルよりも大きいデザトリアンだったものの骸は、それを引き抜いた瞬間に支えをなくし、砂のようなものになって消えて行った。

「あ……。でも割と平気みたいだね。むしろなんかテカテカしてる」「ひえっ！？ よ、よかったあ……。寿命がちよこつと縮んだですっ……」

幸か不幸か結晶には傷一つついておらず、中の花も無事であった。マリリンとコフレは安堵のため息を漏らし額の汗を拭いた。

「さてと。後はボクがやるからマリンはそこで待つてますっ」

「何？ まだ何かあるの？ プリキュアのお仕事」

「この花を奪われた人の体に返すんですっ。これを戻すまでがプリキュアの仕事なんですっ」

「あー、ずーるーいー。人にはあんな真似させといて、自分だけ美味しいところ持つてこうつてわけー？ あたしにやらせなーさーいーよー」

「マリんにやらせる方が不安ですっ。大人しくしーてるでーすーっ」

自分にやらせると詰め寄るマリンを引き剥がし、その場に転がる水晶玉に角柱型の結晶の先を合わせるコフレ。

結晶と水晶玉は暖かな光を発して重なり、小学校低学年ぐらいの少年へとその姿を変えた。

「うっそー、この子があの化け物だったの？ っていうかすごいねそれー、どんなトリックなの？」

「そういうチャチなものじゃあ断じてないですっ。さあてと、今度は……あっ」

「どうしたの？ 持病の便秘の再発ー？ あれ苦しいよねー。電車の中とかでなっちゃうとチヨー最悪でさー」

こころの花を持ち主に戻した瞬間、お腹を押さえてぷるぷると震え出したコフレ。

何の前触れもなしに起こったために、マリンはどうしたのかとコフレの体を大げさに揺すった。

「違いますっ！ 似てるけどまったくの別物ですっ！ こころの、”こころの種”が産まれそうです……っ。ぷりぷりっ、ぷりりりーん！」

マリンの手を払い、尻を上突き出して震えるコフレ。程無くして彼のお尻から、”青色に輝く種”のようなものが飛び出した、のだが。

「おおおっ！？ 何公衆の面前で出してるのよっ、ばっちいっ！

ティッシュにつまんでばいっ」

「ぎえええええっ！ 大事な大事なこの種の種になんてことを！

」

尻から出てきたというイメージの悪さから、排出された種を親指と人差し指でつまみ、ウェットティッシュに包んでゴミ箱に放り込むマリン。

これがプリキュアのやることかと、コフレはゴミ箱に落ちたこの種の種をすぐさま拾い上げ、鬼のような形相でマリンの襟首を掴んで激しく振った。

「種ってというかこれどうみても固形の何かか、体に悪そうな結石じゃない」

「これはこのころの大樹を元気にする肥……栄養が一杯つまったあたりがたいものなんですっ！ うかつに扱うとボクが許さないですっ」

「なんだ、やつぱり肥料なんじゃん。ってかさ、あんたそうやって自分で簡易用トイレ持つてるんだったらそこで座ってしなさいよお」

「これはトイレじゃなくて”ココロポット”！ 集めたこの種を収納するボックスですっ。 つかトイレトイレって言わないでほしいですっ！ ココロポットのイメージが悪くなってしまっすっ！」

マリンのハチャメチャな態度に堪忍袋の緒を切って怒りをぶつけるコフレ。

そして同時にコフレは気付く。プリキュアになるための修行を重ねた人間が、何故こうも物を知らないのかと。いくら達観した人物とはいえ、さすがにこれはおかしいのではないかと。

「っていうかなんでそんなことも知らないんですっ。プリキュアになるために小さい頃から鍛錬を積んだ期待の新星じゃないんですか？ ”つぼみ”」

その不自然さに疑問を持ち、少女の名を呼んで答えを求めるコフレ。しかし、”えりか”から返ってきた言葉は、コフレの想像の斜め上に行くものであった。

「”つぼみ”？ 鍛錬？ 何言ってるの。勝手に言い寄ってきて、勝手にあたしをプリキュアってのにしたくせに。ってか結局プリキュアって何よ。敵もやっつけちゃったんだし、いい加減説明してくれてもいいんじゃないの」

「えっ、ちよ、えっ……。話がかみ合わな……。えっ、えええーっ！？ あなたのお名前は、”花咲つぼみ”じゃあないんですか！？」

「だーかーらあー、誰よそれ。あたしは”来海えりか”。ファッシヨンに興味がある十四歳。よろしくねー」

キュアラワー
花咲薫子に聞かされていたプリキュアになるべき少女の名前は”花咲つぼみ”。

しかし実際に種とパフォームを渡し、プリキュアへの変身資格を得たのは”来海えりか”という、プリキュアとは何の関係もない少女だった。コフレは自分の犯した間違いに気づき、壁に頭をがんとぶつけて自身の過ちを呪った。

「そんな……。そんなッ！ あああ、ボクはなんてことをしてしまっただですつ。まったく関係のない人を巻き込んでプリキュアにしてしまっなんて！ 取り返しのつかないことを……。ボクは、ボクはっ！」

コフレの尋常ではない慟哭に罪悪感を覚えたのか、マリンは変身を解除して元の姿に戻ると、ココロパフォームをコフレに返し、申し訳なさそうな声で言った。

「なんだかよく分からないけど、困ってるんだったらこのコスチューム、その子に返してあげてよ。この可愛い衣装が着れなくなるのは残念だけどさ、あたしはそれなりに楽しんだし」

「できることならそうしたいですが、それはもう無理ですつ。その力もその服もマリン……。いいや来海えりか。君のものとして固定されたのです。もうその子に与えることはできないのです」

「ふうん……。あんたも大変なんだねー」

「そう、大変なのです！ だから！」

「だから？」

「君がその女の子、花咲つぼみの代わりにプリキュアとして砂漠の使徒をやつつけるですっ！」

「えええーっ!? 無理、無理無理無理い！できっこないって！
ってか砂漠の使徒ってなによ」

「なんだかんだでさつきはノリノリで敵を倒していただきます。きつと大丈夫ですっ」

「いいよ、もう十分だよ！ あたしはもういいから、その子に任せなっ」

「そうはイカのなんとかですっ。えりか、これから辛いことも一杯あると思いますが、力を合わせて二人で頑張っつて乗り越えるですよ！ よろしくお願いするですっ」

「いーやーだー！ よろしくしたくないー！ めんどくーさーいー
っ」

「逃がさないですううううう」

そんな使命を背負うのは御免だと逃げるえりかに、こうなったら観念しろと必死に追いつがるコフレ。砂漠の使徒から人々のところを、その根幹であるところの大樹を護るプリティでキュアキュアな戦士・キュアマリンの前途は、限りなく多難なものとなった。

「ああ、いつ妖精さんは現れるのでしょうか……。私がプリキュアになつたら、あんなことやこおんなことも……。素敵な男の人に可愛い、なんて言われたりするんでしょうか……。ああ、でもでも！ プリキュアの本分は砂漠の使徒との戦い。恋にうつつを抜かすわけには……。ああ、でも……」

時を同じくし、どこかの街のどこかの学校。

少女・花咲つぼみは自身をプリキュアに変身させてくれる妖精の到着を、変身した後の自分の姿や活躍を思い浮かべながら今か今かと待ち続けていた。

その思いが無駄になると知らないままに。

早く来ないかなあ、私だけの妖精さんっ。

#2 いいえ！私が本当のプリキュアです！（前書き）

前回のあらすじ。

プリキュアになるべく心身ともに鍛え上げ、

その時を今か今かと待っていた少女・花咲つばみ。

しかしプリキュアになってしまったのは、それらの事情を何も知らない上に、

戦う気ゼロで全く無関係な女の子、来海えりかでした。

#2 いいえ！私が本当のプリキュアです！

キュアマリンとしての初めての戦いから数日後。来海^{くるみ}えりかは相棒の妖精・コフレより、プリキュアと砂漠の使徒についての説明を受けていた……のだが。

「……と、いうわけで。人々のこころの花を枯らして、この星を砂漠化させようとする”砂漠の使徒”。マリンたちプリキュアは、やつらをやっつけるために四百年の間、世代を超えて戦い続けていたんです。ここまでで何か質問はありますか、えりか？」

「わー、あの人かっこいいーチョーおしゃれー」

「……ああもう、ボクの話をちゃんと聞くですっ！」

駅前の往来で話をしていたからか、えりかの注意は自然と周辺の人々に向けられ、コフレの話は右耳を通って左耳から抜け出てしまっていた。コフレのお小言に対し、えりかは小指で耳をほじって興味なさげに生返事を返す。

「だってつまらないんだもん。っていうかプリキュアの力とか別にいいよ。返せっていうなら返すよ。ほら」

「パフュームを差し出されてもダメです。その力はえりかと一体化しちゃったんです。もう分離させられないんです。ボクのもあるので強くは言えませんが……」

「全くもお……。ま、でもさ。あの服チョーかわいいし、どうにもならないっていうんならこのパフュームは持ってもいいよ。戦わないけどー」

「ダメですっ！プリキュアになったんだからこころを入れ替えてしっかりと戦ってもらってます。それにボクがいないとあの姿にはなれないんです。パフュームにこころの種を入れないといけないし」

”強く言えない”と言いつつも、戦え戦えと口うるさく言うコフレに苛立ちを覚えたえりかは、いやらしい笑みを浮かべ、コフレの頬を人差し指でつつきながら言葉を返す。

「でもさ、あたしがうん、って言わないとあんたもどうにもできないわけだよねえ？ そのプリキュアっていうのに変身して、砂漠の使徒ってのと戦えるの、今はあたししかないわけだし」

「ぎくっ！ それは……」

「いいのかな？ そんな態度取ってえ。捨てちゃうヨ？ この香水。すてちゃうよー？」

「そそ、それだけは勘弁してほしいですっ。でも戦いはしてもらいたいのです」

「それは嫌。いい加減あきらめつてのを覚えた方がいいんじゃないのー？」

「こころの大樹を護るのはボクたちの大切な使命なんですっ。あきらめませんっ」

コフレにとつては死活問題だが、えりかにとつては”可愛い服を着られる”ということを除けば、プリキュアの使命などどうでもいいこと。主張や願いがかみ合わないのは当然と言える。

妥協案なく互いに一步も譲らぬ口論を繰り返して平行線を辿る中、二人の前に腰まで伸びる桃色の髪の毛に、丸型眼鏡をかけた端正な顔立ちの少女が現れる。

少女はコフレとじゃれあい、ココロパフュームをちらつかせるえりかに声をかけた。

「それは……ココロパフューム！ なんで、なんであなたがそれを「うん？ どちらさま？」

双方共に面識のない人物だったが、彼女の言葉の中に”ココロパフューム”という単語を聞きとつたコフレは、えりかの手を振りほどいて少女の眼前に駆け寄つた。

「”ココロパフューム”を知っている？ あああの、つかぬことをお聞きしますが……、あなたのお名前は？」

「私はつぼみ、花咲つぼみです！ ……つてことはまさか、あなたが

「こころの大樹から派遣されてきた妖精のコフレですっ。プリキュ

アになるべき少女！ あなたが”花咲つぼみ”、だったのですか！
？ …… ああごめんなさいですつぼみ！ ボクが、ボクがお寝坊なんてしなければ…… つぼみにパフュームを渡すことが出来たのに”

彼女こそ、プリキュアになるべく何年も修練を重ねた素養ある少女・『花咲つぼみ』。

コフレは地面に額を擦りつけて何度も頭を下げると同時に、つぼみではなくえりかにプリキュアの力を与えることとなるまでの経緯を涙ながらに語った。

思うことや言いたいことは多々あれど、泣きながら謝り倒すコフレの姿に同情したつぼみは、乾いた笑顔を浮かべ、両手を軽く振ってお茶を濁した。

「そんな、別にあなたが悪いわけじゃ……」

「ボクが、ボクがお寝坊さえしなければ！ ああ、お寝坊さえしなければ！」

「落ちついてください。誰にだって間違いはあります。今更悔やんでもしょうがないじゃないですか」

「まあまあ、しょうがないよ。それもまた人生だって。この次頑張らなっ」

「あなたは黙っててください！」

謝罪と謝罪のぶつかり合いで暗くなつた雰囲気を和ませようと発した一言だったのだが、完全に逆効果。二人に凄まれたえりかはごめんなさいと力なくつぶやき、肩をすくめた。

「結局……どうにもならないんですか？」

「ボクが至らないばかりに、こんなへんちくりんな子に……」

「ちよつとお！ 黙って聞いてればへんちくりんって何よ！ 失礼ね」

「だから、あなたは黙っててください！」

”へんちくりん”という単語に反応してコフレに食ってかかろうとするえりかだったが、先程以上に二人に凄まれ、目に涙をためて

「ごめんなさいとつぶやき、肩をすくめてベンチに腰を下ろした。

「そう、ですか……そおですか……」

もっプリキュアに変身することは適わない。そのことを責められる相手もない。花咲つぼみは生気の抜け切った白い顔で元来た道をよろよろと戻って行った。

「行っちゃった。背中、煤けてたね」

「本当に、本当に申し訳ないことをしたです……。こおなった以上！ えりかにはつぼみ以上の特訓を重ねて、彼女よりも強いプリキュアになってもらおうですっ」

「ええっ！？ でもそれ、元はと言えばコフレの責任じゃない。あたしが背負う理由にはならないでしょうが」

「いい加減に現実を受け入れるですっ！ えりかが戦わなきゃ地球は砂漠にされてしまうのですよっ！？」

「こんな浮世離れた現実があるかあ！ あたしはやらないよ！ ええやりませんともっ」

「そうは行かないですうう！ まーっでーすうー」

コフレは逃げ出そうとするえりかの後ろ髪を引っ張り、何としても引き留めようとするが、えりかは振り向きざまにコフレの額に人差し指を押し付け、今まで以上にきつい口調で言い返す。

「あなたにも事情があるっていうのなら、あたしにだって事情があるの！ いい？ 今日は学校で数学の追試験があるの！ 休みの日なのにだよ！？ でも受けないと一学期の数学の成績が一になっちゃうし、おやつもおこづかいも抜きになっちゃうの！ 困るでしょ！？ まずいでしょ！？ あたしにとってはそっちの方が問題なの！じゃあね」

反論を許さないほどの早口と勢いで話すだけ話したえりかは、デコピンでコフレを遠ざけ”ふん”と鼻を鳴らして自分の家へと帰って行く。

コフレは痛む額を優しくさすりながら、えりかの態度と自分の不甲斐なさに溜め息をついてうなだれた。

「あああ、逃げられてしまったです。キュアフラワー、キュアムーンライト……同郷のシプレにコロソ、ボクは一体どうしたらいいです……？」

「おーっほっほっほ！ もっとやっちなさいデザトリアーン！ 街を壊してこのころの花を枯らすのよおん」

バイバイクーン！

オレハナニモシテナインダー！

オンナノコガ電車ノ中デ勝手ニオレノ手ヲ掴ンダダケナンダー！

ドウシテダレモシンジテクレナインダー！ バイバイクーン！

時を同じくして、街中から少し離れた公園の中。

頭にオートバイのハンドルが刺さり、両手が回転するホイールの形をした怪物　デザトリアンが公園の遊具を壊し回っていた。

以前の一件と違い、その様子を眺めてほくそ笑む、赤茶けた長髪に腹部の大きく開いた衣装の謎の女性の姿があった。

人々のところを枯らす砂漠の使徒、その幹部の一人『サソリーナ』だ。

「ああ、私は一体どうしたら……って、デザトリアン！ このままじゃ街が、みんなが、このころの花が……！ 私はどうしたら……」

その様子を偶然目撃してしまった花咲つぼみ。

プリキュアでない彼女にデザトリアンを倒す力はない。だが、彼らと戦い合う宿命を背負って今まで修練を積んできた彼女が、この光景を見過ごせるはずがなかった。

「痴漢冤罪い？くうだらなあい。そんなのあんたが疑われそうな顔

してるからでしょ？ そんなこと言って同情引こうとしたって無駄よ無駄」

加えて、サソリーナの被害者のところを軽視し、踏みじめるこの発言。プリキュアであるかどうかなどこの際問題ではない。許しておくわけにはいかない。

つぼみは手に提げていた紙袋を抱きかかえて近くの公衆トイレに入り、中に入っていた”衣装”を身に纏ってサソリーナたちの前に立ちはだかった。

「 そんなことありません！ 大切なのは人を信じる心！ たたえ世界の誰もが疑おうとも私は信じます！ あなたは痴漢なんてやってないって。自信を持ってください！」

「 なっ、どこ、どこなのッ！？ 姿を現しなさいッ」

眼鏡を外し、（偶然の一致だったのだが）キュアマリンの衣装の色違いの衣装を身に纏った花咲つぼみ。彼女は高台からサソリーナたちを見降ろし、人差し指を突き立てて大見得を切った。

「 私は……、私の名は！ 大地に咲く一輪の花！ 『キュアブロッサム』！」

「 きゅあぶろつさむう！？ まさか、あんたがキュアムーンライトの後任のプリキュアなの！？ 」

「 いいえ。私はプリキュアにはなれないし、この衣装は自作です……。けど！ あなたたち砂漠の使徒と戦うことはできます！ この胸にこころの花が咲き誇っている限り！」

「 自作なのその衣装！？ まあいいわ。ただの人間のくせにデザトリアン……、いえ、砂漠の使徒大幹部のサソリーナ様に歯向かうとはいい度胸ねえん。ぐうの音も出ないくらい叩きのめしてあげるわあん」

サソリーナの命に従い、つぼみに飛びかからんとするデザトリアン。恐怖がないかと言われれば嘘になる。

だがそれがどうした。衣装が自作だから何だ。プリキュアじゃないから何だ。自分はそんなプリキュアにあこがれて砂漠の使徒と戦

うために修練を積んできたのではないのか。

つぼみは己が使命の重さと、纏った衣装が醸し出す高揚感に酔い、握り拳に力を込めた。

「プリキュアの力がなくなつて！ 私にはあなたたちと戦うために鍛えてきたこの体があー……あぐっ！ 腕の、骨が……折れてしまいましたっ」

「おーっほっほっほ！ 人間ってのは貧弱ねえん。ただの無謀よむぼ・う！」

高揚感に酔っていたとはいえ、鍛錬を重ねていたとはいえ、ただの中学二年生の女の子。

つぼみの放った渾身の右ストレートは相手の攻撃を寸断させるどころか、逆にデザトリアンの体表の硬度に耐えきれず、聞くも無残な音を立てて砕けてしまった。

自分の無力さと非力さ、そして稲妻に打たれたかのような鋭く激しい痛みが体と心を襲い、つぼみ悲痛な叫び声を上げてその場に突っ伏した。

「ムーンライトもいなくなつて張り合いがなかったし、少しは楽しめるかと思つたけど。こんなもどきの子じゃあつまらなすぎてあくびが出るわあん。もういいわ。本物のプリキュアを呼んできなさい」

呼んでもいないのにしゃしゃり出て、勝手に自爆したつぼみの姿を見降ろし、つまらなそうに乾いた笑いを浮かべるサソリーナ。つぼみはそれでもなお、武器として用意したフラワータクト（浄化効果なし）を杖にしてよろよろと立ちあがった。

「その必要はありません。本物のプリキュアは……私です！ 人のところを奪って関係ない人までも巻き込むその卑劣さ！ 私、堪忍袋の緒が、切れました！」

「切れたからって何い？ あたしを浄化することすらできないくせに。つまらない、ホントつまらないわあんアナタ。デザトリアン、やっっちゃいなさい」

バイバイクーン！

タクトを支えにしてなんとか立っているつぼみに、デザトリアンのホイールの腕が迫って行く。

プリキュアでもないつぼみがこれを正面から受けてしまえば……どうなってしまうかは想像に難くないだろう。

「もう……ダメです……」

気合を込めて立っては見たものの、どうしようもない状況であることを察し、歯を食いしばって目を閉じるつぼみ。もう後はない。万事休すなのか。

「あああつ！つぼみが大ピンチですっ！ 一大時ですっ！ どうすれば、どうしたらっ！？」

それは遠巻きに見ていたコフレも同じである。えりかのだらしなさに落胆し、落ち込むつぼみを励ましに来ては見たが、パフュームをえりかが握った以上、もうどうしようもないのだ。

デザトリアンの腕が上がった。花咲つぼみはこのまま見殺しになってしまうのだろうか。

待て待て待て待てエーい！ 必ア殺！ えりかスライディ

イイイイングウウウ！

「うわおう！？ 何？何ーっ！」

もちろん、そうはならなかった。コフレを振り払って学校に行ってしまったはずのえりかが、お留守になったデザトリアンの足元にスライディングをかまし、腕の軌道を逸らせたのだから。

振り下ろされた衝撃で地面にへたり込むつぼみを優しく抱きとめ、えりかは心配そうな口調で彼女無事を問うた。

「花咲さん」……だっけ？ 大丈夫？

「あなたは……！ どうして！」

「あんなすっごい悲鳴、気付かない方がおかしいと思うけど。戦うのはめんどくさいけどさ、”仲間”が傷つくのを指をくわえて見ているのは、なんだか嫌だし」

「なか……ま？ わたしがですか？」

「そつ、仲間。コフレのうっかりミスのせいで面倒なことになった仲間同士。この際それでいいじゃん、いいでしょ？ ……あたし、来海えりか。私立明堂学院学園に通うファッションに興味がある十四歳。よろしくね、つぼみ」

「うっ、うう……。ありがとございます、ありがとございます……」

抱き止められ、彼女に仲間だと言われて安堵したのか、つぼみの目から堰を切ったように溢れだす涙。

えりかは持っていたハンカチでそれを優しく拭い、つぼみを安全な場所まで遠ざけると、デザトリアンと向かい合った上で、自分の近くに浮いているコフレに対し右手を差し出した。

「さあて。砂漠の使徒だか何だか知らないけど！ この際だし、ぶっ潰してやるっしゅ！ コフレ！」

「はいですっ！」

プリキュア！ オープンマイハート！

使命に目覚めた（ように見えた）ことに感銘を受けたコフレは、えりかに喜んでプリキュアの種を差し出す。

えりかはそれをココロパフォームにセットして体に吹き付け、キュアマリンの姿になった上で、ポーズを決め大見得を切った。

海風に揺れる一輪の花！ キュアマリン！

「その変な髪型のオバサン！ あたしの”仲間”をいじめた落とし前、きっちり払ってもらうからねっ」

変身し、人差し指を突き立てて思う様威嚇するキュアマリン。ようやく本物のプリキュアが出てきたかと、サソリーナはわざとらしく大袈裟に笑って見せた。

「あんたが本物のプリキュアねえん？ その力、見せてもらおうじゃないの。やっちゃんいなさあい！」

「本物かどうかは知らないけど、あんたたちには負ける気がしない！ マリーン、インパクトっ」

マリンはプリキュアの浄化エネルギーを掌に集め、青色の球状に

固めると、襲い来るデザトリアンの腹目掛けて勢いよく放った。

球状のエネルギー弾はデザトリアンの体に接触した瞬間に弾け飛び、デザトリアンをよろめかせ、その体に亀裂を生じさせた。

「まだまだあ！ マリン、フライングクロスチョップ！」

「ああっ！デザトリアンの右腕があああ！ なんて馬鹿力なのよおん！」

「これでどうだ！ マリン、おしりパンチッ！」

「おしりなのにパンチ！？ ひいっ、デザトリアンの体にヒビがつ、ヒビがああッ」

キュアマリンの猛攻によりデザトリアンはもはや虫の息。つぼみとコフレはその力に圧倒され、ただただ息を飲んでいった。

「すごいですマリン！ 一体いつそんな技を？」

「うん？ もも姉と喧嘩してたときの技だよ全部。いやぁプリキュアになるとパワーも段違いだねえ。あ、ちなみに”もも姉”ってのはあたしのお姉ちゃん。ていーん系雑誌で引つ張りだこのカリスマモデルなんだよ」

二人は”一体どんな姉妹喧嘩だ”と突っ込もうとしたが、言うべき雰囲気でないことを察し、自発的に口をつぐんだ。

「さあて、とつと決めちゃいますか」

集まれ、花のパワー！ マリインタクトッ！

デザトリアンを十分弱らせたと判断したマリンは、胸のリボンの前に手を掲げマリインタクトを召喚し、穂先をデザトリアンに向けてにんまりと笑った。

「今度こそ、今度こそ決めるですよっマリン！」

「分かってるって。今回はちゃんと考えてるしっ」

プリキュア！ シャイニングクロススラッシュ！

大丈夫だ、と言ってコフレが安堵のため息を漏らしたのもつかの間。

マリンは前回と同じように穂先に浄化の力を収束させた上で、デザトリアンの体を十字に斬り付けた。

斬りつけられたデザトリアンは、自分が斬られたことに気付かず
に四つの”塊”と化し、角柱型の結晶を残して砂へと還ってしまっ
た。

「えええっ!?! 何も変わってないですっ!」

「変わってるじゃん。技のかけかたとか名前とか。それにこれで斬
つてもこのころの花つてのが無事なのはあのとき確認したしー」

「そもそも! タクトは振り回して敵を斬るようなものじゃないで
すっ。浄化の力を放ってデザトリアンを消し去るためにあるんです
っ!」

「えっ、違うの? まあいいじゃん。このころの花も無事だったんだ
しー。変な髪のおばさんはいつのまにかいなくなつたし。あとは
頼むねコフレ」

「ぐぬぬ……妖精遣いが荒いです。マリんに任せるよりはマシです
けど……」

デザトリアンは消滅し、サソリーナがいなくなったことを見計ら
ったマリンは、後処理をコフレに任せ、折れた右腕を押さえて苦し
がっているつぼみの元へと駆け寄った。

「つぼみ、つぼみ……。大丈夫?」

「キュアマリン……。ありがとうございます。そして、ごめんな
さい」

「うん? どうして謝るのさ?」

「私はプリキュアじゃないのに、私が本物だつて敵に言い張ってし
まいました。あなたのこと、全然信用してなくて……」

荒い息で弱々しくそう語るつぼみに対し、変身を解除してえりか
の姿に戻ったマリンは、にこやかに微笑んで言葉を返した。

「なあんだそんなこと? いいんじゃない。間違つてはないしね」

「でも! あなたは私を助けてくれました!」

「いや、だから。それはつぼみだから助けただけ、だってあたした
ちは仲間……」友達”だし、ね?」

「分かりました! じゃあこうしましょう! 今後私は来海さんの

サポートに回ります。二人で一人のプリキュアになるんです」

「ええーっ？ だからそれはもういいってのに」

「よくありません！ 来海さんみたいな優しいところの持ち主こそ、プリキュアに相応しいんです。そうです、そうに違いありません！ 今回の件で身に染みしました。私はプリキュアに相応しくないと！

「

「えりか。”えりか”でいいよ。”来海さん”って呼ばれるのなんだかやぼったいし、あたしもつぼみって呼び捨てにしてるしさ。それにあたしに感謝してるっていうのなら……、一つ頼まれてほしいことがあるんだけど」

「何でも言ってください。私たちは二人で一人のプリキュアですからね」

それから数日後の朝。右手に当て木を当てて包帯を巻いた花咲つぼみは、『転入届』を持ってえりかの通う”明堂院学園”の職員室へと足を運び、彼女の担任の”鶴崎先生”に対して”抗議行動を行っていた。

「花咲さん、だっけ？ ……ええっと、もう一度言ってもらえる？

「

「私が！ 私がいけないんです！ 来海さんが追試中だと知っていたながら、”逢いたい”と呼び出してしまっ……。彼女は悪くないんです！ どうか、来海さんの数学の評価を下げないであげてください！ なんなら私が代わりに来海さんの追試を受けます！ 満点を取りますから！ お願いします！」

「いや、それはダメでしょう……そもそもあなたは誰？」

「えりか……来海さんの”親友の”花咲つぼみです！ 転入届だって持ってます！ ですからなにとぞ、便宜を！ 便宜を図ってはいただけないでしょうか」

「ああ、分かった。分かったから……」

転入届を持っていて以上無下に断ることも出来ず、鶴崎先生はやむなくつぼみの願いを聞き入れる。

複雑な面持ちで職員室から出てきたつぼみを、えりかはやや申し訳なさそうな顔をして出迎えた。

「ごつめんねえ。つぼみを助けるために、追試中に友達から呼び出しかかっちゃった」。って言うて出てきたからさ。追試の方よろしく」

「あは、はは。いいんですいいんです。えりかは私を助けてくれたんですし……ええ、そうです。そうなんですっ」

本当に彼女で大丈夫なのだろうか。自分のしたことは間違っているのではないか？

つぼみは深いため息をつき、コフレ以上に渋い顔をして項垂れた。

ちなみに、えりかの追試を肩代わりしたつぼみは公約通りに満点を取り、えりかの数学の評価一はなんとか取り下げられたのだという。

#2 いいえ！私が本当のプリキュアです！（後書き）

とりあえず書きためた分だけ掲載。

ちなみにこれ、純粹なえりかの二次創作というよりは、『超光戦士
シャンゼリオン』的なノリをハートキャッチプリキュアでやってみ
たらどうなるか？

という勢いで書き始めたものでした。

（初回のサブタイトルとか展開なんかは今見返すとモロにシャンゼ
リオン第一話ですね）

一応次回以降の構想はあるのですが、他で書くべきことが多いので、
この先が更新されるのがいつになるかは分かりません。

最初にT w i t t e r上で書いてここに掲載する用に構成を行う関
係上、

他の連載作品よりも更新頻度が遅くなることだけはご理解ください。

ではでは。

……そろそろファンから怒られそうだ。どうしよ。

#3 ファブじゃないっしょ！（前書き）

前回までのあらすじ。

プリキュアの服は好きだけと戦うのは嫌だと妖精コフレに嘆願した来海えりか。

そんな彼女に、コスプレが趣味の自称”キュアブロッサム”、花咲つぼみというお友達ができました。

#3 ファブじゃないっしゅ！

「か、鎌倉から転校してきました……花咲つぼみです。どうぞよろしくお願ひいたします」

「はい、よろしく。花咲の席は……いっちはん後ろの窓際だね。案内するわ」

ある日の朝。私立・明堂院学園中等部2年B組に転校生・花咲つぼみがやってきた。

簡単な自己紹介を済ませ、担任の鶴崎先生に連れられ、指定された席に座ったつぼみは、隣に座る少女によくお願ひしますと一礼をする。

「いやあ、追試を手伝ってもらった時はさすがにやりすぎかなあと思ってたけど、マジで転校してくるなんてねえー、えりかさんもびつくりだ」

「あ、あれっ。この席の隣って、えりか……だったんですか？」

「そおそ。っていうかさ、あんたまさか、プリキュアとして戦うためにこの街に来て、この学校に転校してきたって言うんじゃないでしょうね？」

「いえ、転校自体は数日前から決まっていましたよ。まあ、こころの大樹を守るためっていうのも間違いないじゃありませんけど。隣同士なったのは必然なんです。一緒にプリキュア頑張りましょうねっ、えりか」

「ええーっ！？ あたしはそんなに頑張りたくないんだけどなあ」
握り拳を堅く握ってそう語るつぼみに、えりかは顔の前で無理だよと手を振った。

「そんなこと言わずに頑張りましょう！ 今日には広報活動です。いくらプリキュアが強かったって、一人で戦うのには限界がありますからね、

いろんな方にえりかの素晴らしい活躍を見せて宣伝しませんと」

そう語り、目を輝かせて自分の手を握るつぼみに、えりかはやる気がなさそうな声で答える。

「広報って、どこに行こうっての？」

「プリキュアを応援してくれるのは何時だって小さな子どもたちです。近所に幼稚園がありますから、そこで思いっきり宣伝しましよ
う」

「ふうん、要するにロリコンなんだね、プリキュアって」

「ろっ、ロリコンじゃありませんよ！　なんて失礼なことを」

子どもの声援が力になる。テレビでよく見る魔法少女ものの定番だが、実際にそういう立場になり、冷静に観てみると”ロリコン”以外の何物でもない。

それは違うと否定するつぼみだが、そのことに薄々感じているのか、妙に頬が赤い。

えりかは彼女の口到人差し指をちよんと乗せて言葉を封じ、そんなことよりまさ、と言葉を継いだ。

「今日はあたしに付き合っつてよつぼみ。あたしき、ファッション部の部長さんなんだよ。噂の」

「えっ……ああ、そんなこと言っつてましたね。そういえば。でも私、ファッションにはそこまで興味は」

「カマトトぶつちゃって！。女の子だもん、ファッションに興味がないわけではないでしょ？　まあまあ。痛いようにも悪いようにもしいから。今日のお昼、あたしと一緒に来て！　被服室だよ被服室」

「嫌だ……っつて言っつても、ダメなんでしょうね、やはり」

「もちろん。あたしの言うこともたまには聞いてよ、ね」

「つぼみは”今日は広報活動はあきらめるしかないのでしょうか”
とうなだれて息を吐いた。

四時間目終了のチャイムが鳴り響き、お昼休みが始まって学園内がにわかに浮き足立つ中、えりかはつぼみを連れて自分の根城、校舎二階の被服室へとやって来ていた。他の部員が先に来ているのか、被服室の引き戸のガラスに”ファッション部使用中”という張り紙が貼られている。

「はいっ。ここがファッション部の部室。みんなー！ 作業一旦すとーっぷ！ 仲間だよ、しんにゅー部員が入ったんだよー。うちのクラスの花咲つぼみさん」

えりかは入るなり手を大きくぱんぱんと叩き、中で作業している三人の部員の注意をこちら側に向けた。

「とりあえず、小豆色で髪の毛の長い子が沢井なおみ、眼鏡っ子ががとし子、シヨートヘアの子がるみ子だよー。ああ、名前は覚えなくていいよ。どうせ途中から呼ばれなくなるだろうし」

「いやっ、それは失礼なのは……」

唐突かつ簡単すぎる自己紹介に、怒った三人の部員がえりかを押しさえつけ、仕返しにと彼女を脇やうなじをくすぐり回す。

女の子たちのきゃいきゃいと楽しそうな声が部室を包む中、シヨートヘアのるみ子がその中から這い出て、きよとんとしたまま何も出来ずにいるつぼみに声をかける。

「ファッション部へようこそ、花咲さん」

「分からない事だらけだと思うけど、これはこれで結構楽しい部活だから」

「えりかはちよつとうつとおしいけどねー」

るみ子に続き、とし子となおみもよろしくと声をかけ、つぼみはやや緊張した面持ちでよろしくお願ひしますと一声かけて会釈する。「ところで……、この部活はいつたい何をするんですか？」

つぼみは被服室の周囲を見回し、彼女たちが何をしているのかを問う。その問いに三人の部員たちは一人一人、順番に口を開いて説明を始めた。

「基本的には……、部費で布地を買って、デザイン考えて、ひたす

ら服を作ってーって感じかな」

「時々アクセとかを買いに校外活動したりとかね。えりかの家のフエアリードロップ。ここの部員はあそこの商品が何でも二割引きだからさー」

「それともう一つ。今は”文化祭”の準備なんかもやってるよ」

「文化祭にファクション部？　そこで何をするんです？」

つぼみの素朴な疑問に、くすぐりから解放されたえりかが、ない胸を叩いて答える。

「よくぞ聞いてくれました。我がファクション部は、秋に行われる学園祭で、”ファクションショー”を行おうとしているのです。しかも、自分たちの自作の衣装で！　どう、どう？　すごいっしょ？　チヨーいかすでしょっ」

「ははあ。私、えりかの事を誤解していました。のほんと適当にじゃなくて、そんな目標を持って部活の部長さんをやっていたんですね。すごいです！」

「何よ！　失礼ねー。あたしだって、大好きなことには本気出すっの」

つぼみは”その気持ちを少しでもプリキュアにも充ててほしい”と言おうとしたのだが、えりかにA4の用紙と鉛筆を渡されて押し黙った。

「なっ、なんですかこれ」

「と、言うわけで……つぼみも何か描いてみてよ」

「描いてみて……と言われましてもお。私、今ここに来たばかりのど素人ですし」

「大丈夫だよ花咲さん、別に誰も笑わないし」

「まずは描いてみるのが大事なんだし」

「わたし、花咲さん好きですし」

不安げな顔をして用紙を胸に抱くつぼみに、三人の部員は大丈夫だよと優しく声をかける。

一人、励ましの言葉とは違う何かが聞こえたが、幻聴だと思って

流した。

三人に励まされ、えりかに描け描けとせがまれたつぼみは、仕方なく机に向かい鉛筆を走らせた。

「……と、いうわけで何点が描いてみました」

「早ッ、っていつかうまッ！ どゆこと、どゆこと!？」

それから数分後。つぼみは数点のデザインを上げて部長であるえりかに提出した。

ただ早いだけではない。即興で描いたとは思えないほど、服としてのデザインも素晴らしく、洋品店の娘であるえりかですら、驚愕に顔をひきつらせてしまう。

えりかや他の部員たちが驚嘆の声を上げる中、つぼみはずかしそうに口を開く。

「お裁縫程度でしたら昔からおばあちゃんに手解きを受けてましたし、デザイン程度なら、昔考えていたものが何個かアイデアのストックがありますし……、ごっ、ごめんなさい！ 皆さんのものと違って幼稚なものばかりで」

自信無さげで恥ずかしそうに縮こまるつぼみだったが、それを見せられたえりかはあまりの出来の良さに、もしかしたら部長の座すら危ういのではないかと思ひ絶句していた。

「あ……、やっぱりダメ、ですよ。こんなのじゃ」

「う、ううん！ いいよ、すごくいい！ あんまり上手すぎてなんて言うべきか分からなかっただけ」

「ほ、ホントですか！ 私、すごく嬉しいです」

あのピンクの派手派手な衣装、本当に自作だったんだ……。

えりかは参考に見せてあげようとしていた自身のデザイン画を膝の裏に隠して引込めた。

自分に向けられるえりかの怪しげな笑顔が気になるものの、つぼみは被服室で作業を続ける他の部員たちの元へと向かう。

「その縫い方だと元の生地を殺してしまいますっ。ここは…

…」

「それなんですけど、こちらの花飾りをアクセントに加えてみてはいかがでしょうか」

「ああ、型紙が少し歪んでいます。ここは、余計な力を入れずにしやーっと」

「花咲さん、すごい！ 本当にファッション部の活動は初めてなの？」

「部活の部長っていうよりも、本当のプロみたい！」

「せっかくだし、花咲さん……いやつぼみちゃんがここの部長になつちやいなよ！」

「そ、そんな……私はそんな器では」

今日入部したばかりのつぼみが、皆の注目の的となり羨望の眼差しを向けられている。

対して自分はどうだ。ないがしろにされているどころか、存在すら忘れられていないか？ 誘ったのは自分なのにこの物悲しさはなんだ、なんなのだ。このままではまずい、絶対にまずい。

部員三人に囲まれ、楽しげな笑顔を浮かべるつぼみを傍から見つめ、えりかは未だかつて体験したことのない危機感に苛まれ、部屋の隅で一人怯えていた。

「いやあ私、嬉しいです。てつきり来てくれないものだと思ってましたから」

「い、いやあ。気が向いたから、ね」

「さっ、ここでしっかり宣伝しましょう！ プリティでキュアキュアな超戦士・キュアマリンのことを」

そして、次の日。先日アレほど嫌だ嫌だと言っていたのにも関わらず、彼女と共に近所の用地編へとやってきた来海えりか。

自分の勝手な言い分に従って部活に来てくれたことに対する礼になるのだろうが、部員達から羨望の眼差しを向けられたつぼみに取り入ろうという魂胆の方が強いのだろう。

「さーっ、ちゃっっちゃと行ってちゃっっちゃと終わらせちゃいましょー」

「いいですか、えりか。相手は小さな男の子女の子です。無暗に怒ったりしないようにしてくださいね。私たちはおねーちゃんなんですから」

「はいはい。つぼみはー々しんぱいしょーだなー……ん」

「どうかしましたか、えりか」

「いやね、あのクラス……」

何か気になることがあったのだろうか、えりかは目の前の教室を指してつぼみの注意をそちらに向ける。

「きゃー、いやーッ！」

「やったやったー！ ノリコ先生がびっくり箱みて腰抜かしたー」

「これだからノリコ先生いじめるのやめられないんだよなー」

「ヒロくんたち、ーノリコ先生いじめるのやめてあげなよおーかわいそーだよー」

「いいじゃんよーノリコ先生ったら、どんなにいじめても怒らないし、いい声で泣くんだけー」

「誰も困らないもんなー」

「でも、いけないことはいけないんだよー」

「うっせー、だったらお前もいじめてやるうかーうらー」

「きゃーいやー！ 助けてー」

その中で繰り広げられていたのは、黒髪の長髪をヘアゴムでまとめ、赤縁の眼鏡をかけた保育士らしき女性が、十数人の園児たちに“いじめられ”、目に涙を浮かべている様相だった。えりかと、彼女に言われてそれを見たつぼみは大丈夫なのかとため息をついた。

「宣伝だなんだって前に、まずこれどうにかしなきゃいけないんじ

やないの？」

「ノリコ先生……まだ保育士さんやってたんですね」

「何？ あの先生つぼみの知り合い？」

「うちのお母さんの友達です。子どもが好きでこの仕事をやっているらしいんですけど、泣き虫で怒るのが嫌いな人で……。でも、これはいい機会です。ノリコ先生といじわるな園児たち。キュアマリンが両方共更生させれば、子どものみならず大人の支持もゲットできちゃいますよ」

つぼみの言葉に、「そこまでやるの」と不満を漏らすえりか。とはいえ、このままでは彼女に取り入ることが出来ず、自主的に参加した以上そんなことを理由に抜けるのは、あまりにも自分勝手すぎる。

えりかは「わかりましたよ」とやるせなくつぶやき、手をひらひらと振った。

「しかしさあ、できるかなあ、あたしに」

「私がバツクアップします。大丈夫ですよっ。ささ、行きましょう」
「ふあーい」

正直なところ、それが一番不安なんだけどなあ。

不満を喉元で押し留め、えりかはつぼみの後に続いて幼稚園内へと入って行った。

つぼみとえりかが園内に足を踏み入れたのと時を同じくし、園内裏の洗い場の前。

女性保育士”ノリコ先生”は、他の保育士に後を任せ、一人さびしく子どもたちのいたずらで汚れたエプロンを洗っていた。

「はああ……、子どもを満足にしかることもすらできない。私、向いてないのかなあ、この仕事……」

エプロンを洗いつつ、子供に対して過度に甘い自分を恥じるノリ

コ先生。

こんな自分を変えたいとは思うものの、子どもたちの泣き顔を想像してしまうと、どうにも本腰を入れてしかる気になれない。そのせいで子どもがつけあがると言う悪循環に、彼女はあきらめのこもったため息を吐いた。

ふっふっふ、いい感じにこころの花が萎れているぜよ！

「誰？ 誰なのッ!？」

ノリコ先生の煤けた背中の中の後ろから聞こえてくる、荒々しい男の声。

気配を感じて振り返った彼女の目の前には、燃えるように赤い長髪に小麦色に焼けた肌、かつての侍のような羽織（しかし下は黒のスポン）を身に纏い、筋骨隆々の雄々しき体の男が立っていた。

男は腰に差した剣を、見せつけるように彼女の目の前で抜いて見せる。

「俺は砂漠の使徒の大幹部、クモジャキー！ 育児疲れで萎れに萎れたこころの花、この俺がいただくぜよ」

「いや別に育児じゃな……きゃー!」

こころの花よ、出てくるぜよーッ!!

きゃー! いやああー!

クモジャキーは無言を言わず、彼女の中から六角柱の水晶を抜き取り、その先についた球だけを外して放る。

「さあてと、手頃なものは……と、あのぬいぐるみが良さそうぜよ。デザトリアンの、おでませよーッ」

水晶を手に辺りを見回し、洗い場に無造作に置かれていた”恐竜のぬいぐるみ”に目を付けたクモジャキー。彼はその中に水晶を突っ込み、恐竜のぬいぐるみを数メートルほどの大きさの”デザトリアン”へと変貌させた。

「さあ行けデザトリアン！ 育児が面倒だと言つのなら、その根幹！ 育てるべき子どもたちを片っ端から排除するぜよッ」

キョーリユー! コワイゾー! ツヨイゾー!

「いいですか、えりか。次にあのヒロ君って子が何かしたら……、マリンに変身して、やさしく、やさしく諭してあげるんですよ。厳しすぎは逆効果ですからね」

「あいあい、わかってますよーっと」

一方、園長から”ボランティア”ということに入園許可をもらったつぼみとえりかは、入口の引き戸前で、中に入ってから段取りを示し合わせていた。

えりかは「そんなに細かく言わなくても分かる」とぼやくも、生真面目なつぼみは「こういう時こそきちんとした段取りが必要なんです」と言っただけで聞かない。

しかしそんな二人の話し合いも、突然空から現れた妖精のコフレによって水泡に帰すこととなった。

「つぼみー、えりかー！ 出たです、デザトリアンですうー！ ころの花を奪われたのはノリコ先生ですっ」

「コフレ！ あんた一体今までどこに……って、デザトリアン!?」
「私たちよりも先に……。これは、プリキュアの名を貶めようとする砂漠の使徒の策略に違いありません！ 私、堪忍袋の緒が切れませんでした！」

「いやいや、まだそうと決まったわけじゃあ……」

ここにデザトリアンが来たというだけで過大な解釈をし、一人で勝手に盛り上がるつぼみに対し、それは違うでしょといさめるえりか。

キョーリユー！ ワルイゴハイネガー！ ワルイゴハユル
サナイゾー！

「でっか！ ってかやばいよこれ！ このままじゃ園児たちがピンチピンチっ」

「ですね。宣伝だの何だのは後回しです。えりか、急いで変身を」
「わかってるって」

デザトリアンの邪魔はさせないき、プリキュアッ！

デザトリアンが入口まで迫っていると言う切迫した状況の中、彼女たちの前に先のクモジャキーが現れる。

その佇まいと言動から、二人は自分たちの味方でないことを認識し、どいてくれと声をかける。

「ちよつと、空気読んでよ！ 子どもたちが危ないの、分かるつしよ？ 分かるでしょ？」

「ふん、そんなことは知ったことじゃあないき。俺に大切なのは血沸き肉踊る、命と命をかけた真剣勝負ぜよ。新しいプリキュアとの戦い！ キュアムーンライトがいなくなつて久しい今、俺の渴きをいやすことが出来るのは、そいつとの一対一の真剣勝負だけぜよ！ さあ、答えるぜよ！」 キュアムーンライト”の後釜のプリキュアというのは「

二人にそう問いかけ、彼女たちに人差し指を突き立てるクモジャキー。つぼみは以前現れた幹部の一人・サソリーナから話を聞かずにここまで来たのかと、彼の猪突猛進ぶりに呆れを感じた。

とはいえ、勝負がしたいと言うのは本当だろう。勝負にかける情熱が、気迫が違う。

デザトリアンを放っておくわけにはいかない。つぼみは諦め、凜とした表情を作つて言った。

「分かりました。プリキュアは……」

「この子！ このピンクの子です！ あたしじゃないです」

「はい、そうです私……つて、えつ、ええーッ!？」

「プリキュアは自分の隣の子です」と言おうとしたつぼみだったが、あるうことかえりかはつぼみを指さして「彼女がプリキュアである」と述べ、その場から離れようとする。

つぼみは離れようとするえりかの襟首を掴み、その場にしゃがみ込ませて耳打ちをした。

「ちよ、ちよつと……! 何を言ってるんですかえりか、私は」

「デザトリアンはプリキュアであるあたしにしか倒せないんだし、

あいつなかなか強そうじゃん。二人同時に相手は無理。二人で一人のプリキュアなんでしょ？ デザトリアンはあたしがなんとかするから、つぼみ、ここは任せた！」

「ちょ、ちよっと……えりか！ 待ってくださいッ」

つぼみの制止も聞かぬまま、彼女を振り切つてデザトリアンの方へと向かうえりか。

追い切れないと判断したつぼみは、覚悟を決めて腹をくくり、再度凜とした表情を作ってクモジャキーと向かい合った。

「い、いいでしょう。では私が……キュアムーンライトの遺志を受け継ぐこの私がお相手します。ですが、ここでは子どもたちに被害が及びます。少し場所を移してはもらえませんか？」

「勝負をするのならどこでやったって文句は言わんき。案内するぜよ」

つぼみの言葉に従い、律儀に幼稚園から場所を移すクモジャキー。凜とした表情を顔に浮かべつつも、つぼみは「本当に私で大丈夫なんだろうか」と怯えて震え、冷や汗をどっとかいていた。

ドオーシダレモワカツテクレナイノ？ ワタシハエン

ジタチヲアイシテイルノニー！

「うわおっ、やばいよ、やばいよ！ 子どもたちが……」

つぼみたちが幼稚園を離れたのと同時に、デザトリアンの元へと向かうえりか。

時既に遅し、恐竜のぬいぐるみのデザトリアンは、不気味な声を上げながら園舎の中に手を突っ込んでいた。

「あーんあーん、恐いよお、ノリコ先生助けてえ」

「ヒロくん、こんなときだけ先生に頼るのずるいよお」

「恐いもんはこわいんだよー！ たすけてー」

恐怖に怯え、泣き叫ぶ子どもたちの声が園舎の中にこだまする。

「大変です大変ですーっ！ デザトリアンの足を止めなきゃですっ
「そういうのはあんたの仕事でしょコフレ！ ほら、さっさと行く
！」

「ボっ、ボクですかっ！？ や、やああいデザトリアンッ！ こっ
ち、こっちですっ！」

子どもたちは自分が助けるからと、コフレに敵の注意を引き付け
る様言っ放すえりか。

コフレがデザトリアンの目の前を飛び回って注意を引き付けてい
る間に、園舎の入り口の引き戸に手をかけるえりか。

「さっきまであんなにやんちゃだったのに、ゲンキな子だねホン
ト」

「えっ、おねーちゃん、だあれ？」

「あたしはえりか、来海えりか。あんたたちを助けに……きて……
んんんっ」

中で震える子どもたちを助けようと引き戸を引っ張るも、先のデ
ザトリアンの攻撃によって扉はひしゃけており、えりかがいくら引
っ張っても腕が一本入る以上の隙間をねん出することは適わない。

「どうしたのさお姉ちゃん、俺たちを助けてくれるんじゃないのか
よ！？」

「そうしたいのはやまやま……だけどッ、こっちにも色々とつごー
つてのがあ……のっ」

自分の力ではこの引き戸を開けることはできない。そう理解した
えりかは引き戸を開けるのをあきらめて子どもたちに背を向け、デ
ザトリアンの注意を引くコフレの元へと駆け寄る。

「コフレ、コフレ！ こころの種出して、早く！」

「ひいひい……こっ、子どもたちのことはいいいんですかあえりかア
「事情が変わったの。プリキュアに変身しなきゃいけないんだから、
急いでよ」

「ああもっ……、プリキュアの種、いっくですうー！」

えりかはプリキュアに変身するべくポケットからココロパフュー

ムを取り出し、それに合わせて青色のこころの種を産み出すコフレ。それをセツトして体に吹き掛ければプリキュアに変身できるの、だが。

キョーリキュー！

「よおおし、プリキュア！ オープンまいは……ああっ！」

「こつ、ココロパフュームが、幼稚園の中に飛んでっちゃったですつ」

こころの種をパフュームにセツトしたその瞬間、デザトリアンはえりかの方に向けて太く大きな腕を振るつたのだ。

大振りな上そこまで素早くなかったことが幸いしてか、怪我なくかわすことが出来たものの、少しだけ開いた引き戸の中にココロパフュームを落としてしまった。

「ちよつと、ウソでしょっ！？ これじゃあ中に入って取りに行けないじゃん！ コフレは？」

「隙間が絶妙すぎて、ボクでも中に入れないですっ」

「あわわ、どうしよ……、どうしよっ！」

このままではプリキュアに変身できない。襲い来るデザトリアンに対しても無力だ。

どうすればいいかと思案を巡らせるえりかの目に、開かない引き戸の奥で縮こまって震える園児たちの姿が映る。えりかはそうだからだと声を上げ、引き戸の中に自分の手を強引に突っ込んだ。

「その園児たちー、そう、君たち、君たちー！」 ココロパフューム”とつてー！ おねがいー」

「こころぱふゅーむー？ 四人組の歌手のひとり？」

「違う違う、こつ、掌ぐらいの大きさで、しゅーってやるやつ、しゅーって。取ってきてお願い」

「ええつと……。おねーちゃん、これー？」

彼女の呼びかけに応じ、みつあみの少女がそれらしきものを持って手だけを突っ込んでいるえりかに手渡す。

えりかは握り心地を確かめると、それがなんであるかを見ないま

ま、自分の服に向かって吹きつけた。

「よおつし、オープンマイハー……ひゃあつ！ 水出たよ水！ ちよつと何これ！ おもちやの水鉄砲じゃん！ うああ、制服の胸元に……なにこれ、醤油！？」

「あつ、それ今日のお昼に入れたの。ノリコ先生を驚かせるために」

ココロパフォームだと思って胸元に吹き付けたそれは、中に醤油の入った”おもちやの水鉄砲”であった。制服の赤いリボンは醤油で真っ黒に染まり、それを伝って制服の方にまでぼたぼたと垂れて来ている。

えりかは怒りにまかせてそれを放ると、水鉄砲を持ってきた少女に当たり散らした。

「なんてことすんのよー！ クリーニングに出さなきゃいけないじゃんこれー！ 制服だよ、制服なんだよ！？」

「お、怒らないよで……、何かが飛んできたのは分かったけど、誰もそれを見てないし、おもちや箱の中に入っちゃったから、どれがどれだか分かんないんだもん」

「あああ、この忙しい時にもう！ 誰か、誰か！ 他には、他にはいないのー！？」

「おねーちゃん、パス！」

そんな中、率先してノリコ先生をいじめていた”ヒロ君”が、えりかに向かって”何か”を投げつけた。

今度こそ、今度こそ当たりであつてほしいと思いつつそれを握り、えりかは再びそれを胸元に吹き付ける。

「よおし、今度こそ！ おーぶんまいはー……ひゃつ、ひゃああつ！？ 何あれ何これ！？」

ヒロ君が放つたそれもココロパフォームではなく、胸元に向けて吹き付けたそれは、醤油で染みたりボンを瞬く間に凍らせてしまう何だと思つて手に取つたものをまじまじと見つめると、そこには”殺ジェット 這う虫用”との表記がなされていた。要するにパ

「フュームではなく”殺虫剤”である。

「くあーっ！　なんでこんなものがア！？　あたしのリボンが、リボンがあああ」

「しゅーってやるんだからこれだろー？　先生よくこれで台所のあいつを倒すし」

「違あう！　こんの馬鹿あ！　っていうかなんでこんなものが普通に置いてあるわけ！？　火の元で使うと引火しちゃう危険な殺虫剤でしょこれ！　早いとこ製品会社に送り返さなくちゃでしょ！」

「あああん、こわいよあ」

自分の制服を汚され、鬼のような形相でヒロ君に当たり散らすえりか。その様子に当人はおろか、怯えて部屋の隅で縮こまっている子どもたちも泣きだしてしまった。

「ごっ、ごめんね……あたしもそんなつもりじゃあ……ああもう！

誰か、誰か！　早く取ってきて！　あたしのココロパフューム！」

「泣きたいのはこっちなのに」という言葉を喉元で押し留め、ココロパフュームを持ってくるよう園児たちに嘆願するえりか。

「おねーちゃん！　はい、これっ」

そんな中、やや茶かかった髪の毛の少女がえりかに”何か”を手渡した。

目に涙をいっぱいにためている少女を見て、はっと我に還るえりか。彼女たちだって怖いんだ、自分の助けを待っているんだ。自分だけ自棄になって腐っているわけにはいかない。

「三度目の正直！　今度こそッ、プリキユア！　オープンマイハートッ……」

万感の思いを込め、魔法の言葉を口ずさんでそれを吹き付けるえりか。

薔薇のフローラルで心地よい香りが彼女の鼻孔をくすぐり、彼女の心を天国へと誘う……。

「はああ、なんて心地の良い香り……癒されるう……。って！　ああ……もう！　ファブじゃないっしゅ！」

彼女が手にし、胸元に吹き付けたのはココロパフュームではなく「ファブリーズ」。

”吹き付ける”、”良い香りがする”という点では共通しているが、片や人の体に吹き付けるもの、片や部屋の壁や物に吹き付け、嫌な臭いを消すためのもの。用法の時点で間違っている。

えりかは「やってられるか」と叫んでファブリーズを地面に叩きつけ、盲目にコフレを追うデザトリアンに向かって声をかけた。

「やあーいやあーい！　こんののろまー！　悔しかったらこっちまで来てみなあー！」

「ちよつ、えりか！　何をするつもりですっ！？」

「園児たちのみんなー、部屋の奥に固まって伏せてー！」

「ふせて？　って……うわああああああああつ！」

えりかの言葉に反応し、身を寄せ合って固まり合う園児たち。彼らは知らない。せつかく引き離れたはずのデザトリアンが再び引き戸の前に戻ってきていることを、そして、えりかがそれを引き付けていることを。

デザトリアンはえりかの誘いに乗って右腕を横薙ぎに振り払う。

かがんでそれをかわすえりかだったが、かわされて空を切ったデザトリアンの右腕は、ひしゃけて開き切らない引き戸に当たり、めきめきと嫌な音を立ててそれを壊して吹き飛ばした。

「うわあああああん、こわいよおお、助けてええ」

何の前触れもなく起こったそれを目の当たりにし、園児たちは恐怖と困惑で大混乱。

誰もが大粒の涙を流し、枯れそうなほどの大声を上げて泣き出してしまふ。

「ちゃんす！　これでココロパフュームが取りに行ける！　ええつと……おもちゃ箱おもちゃ箱」

しかし、こんなことを仕掛けた当人は子どもたちの鳴き声の合唱などどこ吹く風。引き戸がなくなった園舎の中に入り込み、おもちゃ箱の中に落ちたというココロパフュームを探し始めた。

コフレはあまりのことに言葉が継げなかったものの、なんとか自分を奮い立たせ、おもちゃ箱の中をひっかきまわすえりかの頬をつねって怒りをあらわにした。

「なんてことをするんですえりか！ 子どもたちを何だと思ってるんですッ」

「だあかあらあ伏せてって言ったじゃん。それに、みんな無事なんだから問題なしっしょ！」

「結果がどうあれ、子どもたちを危険にさらすやり方が良くないって言ってるんですっ！」

誰一人怪我を負わずに済んだ、自分の足でココロパフームを取りに行けるようになった。結果的にはそれが最良の手立てだったが、一歩間違えば護るべき子どもたちを傷つけてしまうところでもあった。

怒られて然るべき問題であったが、えりかは「そういうのはあとあと」と自分にまわりつくコフレを振り払い、おもちゃ箱の中に隠れていたパフームを取り出して構える。

「それよりもっ、先生のくせに、よくもみんなを泣かせてくれたわね！ あたしがぼっこぼこに叩きのめしてやるっしゅ！」

「全部おねーちゃんのせいじゃん」

「うるさいなあもう！」

プリキュア！ オープンマイハート！

園児たちに悪態を突かれつつも、ココロパフームを自分の体に吹き掛け、”キュアマリン”へと変身するえりか。

キュアマリンは園舎に入ろうとするデザトリアンに体重の乗ったドロップキックを仕掛け、園舎から運動場へと引き離す。

「だいたいあんたねえ、生徒たちがかわいから叱れないのは先生としてどうなのよ！ いいことをしたら褒める、悪いことをしたらいけないって叱る！ それが愛でしょ先生でしょ！ そんな弱虫に子どもたちの先生を名乗る資格なんてないっしゅ！ 一気に決める

よ！」

集まれ、花のパワー！ マリーンツ、タクトツ！

決着をつけるべく、胸の前に手を置いて”マリンタクト”を呼び出すマリン。

コフレはちょっと待ったと、タクトを振るおうとするマリンの手を掴んだ。

「子どもたちの目の前ですっ。いつもみたいのはやめるですっ！」

「やめろって言われても、だったらどうすればいいのよ」

「今まで言い忘れてましたけど、プリキュアにはデザトリアンを浄化するための強力な必殺技が備わっていますっ。タクトにこころの花の力を集中させて”ブルー・フォルテウエーブ”と叫んで発射するですっ」

「発射するって……、そんな技があるんなら最初に教えなさいよコフレ」

「マリンが人の話を聞かないでばっしゅ！ ばっしゅ！ するのが悪いんですっ」

「ああもう、わかったよ。だったら……」

仕方がないかと後ろ手で後頭部を軽く搔き、コフレの言う通りタクトに自分の中に宿る力を集中させるキュアマリン。

タクトの先に溜まったそれは、緑色の葉に青色の花の蕾ツボミの形をしたエネルギーの塊へとその姿を変えた。

「おおっ、なんかすごそうじゃん！ かっこいいじゃん！ よおっし、いっくよー！」

プリキュア！ ブルー・フォルテウエーブ！

タクトの先をデザトリアンに向けて構え、叫びと共に充実したエネルギーを一気に放つキュアマリン。花にも似たエネルギーの塊は周囲の風をも撒き込み、勢いを増して飛んで行く。

ほぶん。

放たれたエネルギーの塊は確かにデザトリアンに”当たった”。
そこまでは良かったのだが、デザトリアンのお腹に当たったそれは
焼くことも貫くこともなく、外に干した敷布団を布団叩きで叩いた
かのような音を立てて弾き飛ばされ、幼稚園の屋根にかすって穴を
開けた上で、虚空へと飛び去って行った。

「ど……どうなってるですかこれは！」

「それをあたしに聞かう!? こっちが聞きたいくらいよ！」

「はっ、まさか……、プリキュアの力が、こころの花の力が足りて
いないせい!? そうです、そうに違いありませんっ！」

「ちよつと、どういうことよそれ」

「えりかはつぼみと違って選ばれてプリキュアになったんじゃない
です。だから、力が足りないのはむしろ当然のことですっ! ああ
あ、なんで最初に気付かなかったんですかボクはあ」

満足に必殺技すら放てないマリンの姿を見て、改めて自分の犯し
た罪の重さに頭を抱えるコフレ。

マリンはそんなコフレの顔と言動に怒りを覚えつつも、再びタク
トに力を込める。

「なんだかよく分からないけど、あなたの言う方法でダメだったん
なら、あたしはあたしのやり方でやらせてもらおうよ! 苦情は一切
受け付けません! いじょっ」

「ちよ、ちよつと待つです……」

プリキュア! フォルティッシモスラーッシュ!

コフレの制止も聞かぬまま、いつものようにタクトの先にだけ力
を集中させて飛びかかり、

音楽記号の”F”^{フォルテ}の記号を描くようにしてデザトリアンを切りつけ
るマリン。

首を薪のように縦一線に斬り裂かれ、腕や胴体をバラバラにされ
たデザトリアンは、不気味なうめき声を上げ、こころの花の入った
水晶を残しまるで煙のように蒸発して行った。

「にゃっ。これであたしの勝ちっしゅ」

「あああ、なんてことを……！ 愛と希望を与えるプリキュアが、子どもたちにトラウマ植えつけてどうするですっ」

「文句も苦情も受け付けないって言ったでしょ。それとも、他にいいやり方でもあった？」

「くろう……。やるにしたってやり方を考えてほしいって言ってるんですっ」

マリンの言い分は尤もだが、コフレの言い分も無視できない。なにせ、

「ひいああああ、怪獣の手と足がもげたああ」

「たすけてー！ こわいよ、こわいよー」

「あたしたちもばらばらにされちゃうー！」

「ままー！ ぱぱー！ ぼくはここだよー、むかえにきてええええええ」

あまりに凄惨な光景を目の当たりにした園児たちは、落ちつくどころか先程以上に声を上げて泣いている。キュアマリンとデザトリアンの戦いは、幼稚園児たちに必要以上のトラウマを与えてしまったのだ。

「子どもたちに夢やきぼーを振りまくプリキュアがぜつぼーを撒き散らしてどうするんですかっ！」

「いいじゃん別に。最近ハマホーしょーじょだって絶望を振りまくひっどい時代なんだしさあ」

「いや、だからこそプリキュアは希望を振りまかないといけないんですっ！ まったくマリンはいつもいつも！」

あたしだって精一杯頑張ってるのになあ。不公平じゃない？ これって。

コフレのお小言を聞き流しつつ、マリンは自分の複雑な境遇にため息をついた。

「貴様……どうみてもただの人間にしてなかなかあやるき。名前は？」

「花咲つぼみ……、キュアブロッサムです」

一方、幼稚園近隣の河原では、（いつの間にか）キュアブロッサムの衣装に着替えたつぼみと、砂漠の使徒の幹部・クモジャキーとの戦いが行われていた。

武器を一切使わない徒手空拳の猛攻に、つぼみは目や腹に青あざを作つてふら付いており、いつ意識を失つてもいいほどに疲弊していたが、対するクモジャキーもまた、肩で息をするほどに弱っていた。

「この俺に汗をかかせるとは……。ここで倒してしまうのは惜しい。キュアブロッサム、今日の勝負は預ける。もっともつと強くなって俺の前に現れるぜよ！」

つぼみもつと強くなると確信を持ったクモジャキーは、踵を返し捨て台詞を残して去つて行く。

彼女がプリキュアではなく、ただの人間であることを知らぬまま。

「は……はふう……。た、助かりました……」

クモジャキーがいなくなったことで張り詰めていた緊張が一気に解け、力なくその場に倒れ込むつぼみ。人外の敵を相手にし、よくもここまで持ったなあと、途切れそうな意識を繋ぎ止めつつ、自分で自分を褒めていた。

「つぼみー、大丈夫ー？」

「つぼみ、砂漠の使徒相手によく頑張つたですっ」

そんなつぼみを優しく抱きとめ、膝に乗せる者がいる。デザトリアン騒動で幼稚園にいられなくなったたえりかとコフレだ。つぼみは嬉しそうに笑みをこぼし、右手の親指を立てて答える。

「はい、なんとか……。前回の入院中に”局部麻酔”で体の痛覚を鈍らせたのと、全身に”ボルト”を埋め込んで体そのものを強くしていたおかげです」

「え……ッ!? うそっ、あの後そんなことがあったの!? やり

すぎじゃないっ!？」

「でもそのおかげで私は生きてます。後悔はしてません」

「そりゃあ……そうだけど」

プリキュアとしてみんなを護るために、いや、力がなくてもここまでやるのか。

えりかはつぼみの”戦士”としての覚悟と行動力に、感心を通り越して呆れてしまった。

「それよりも、ノリコ先生はどうなりました？」

「うん？ ああ……無事よ無事。まっ、このスーパー美少女来海えりかちゃんにかかれば、あんなデザトリアンお茶の子さいさい！」
「宣伝するどころか子どもたちにもトラウマ植えつけたくせによく言うですっ」

「うるさいうるさい！」

「トラウマ……っで、どういことですか？」

「あ、ああ……。そう言うことは後々！ あたしも疲れちゃったし、今日は休もうよ！ ね？ ねっ」

つぼみの問いを封殺し、彼女に肩を貸して起き上がらせるえりか。陽が落ち始め、辺りはそろそろ夕方へ変わる頃。夕日に照らされた自分たちの影が、とてもとても長く見える。

自分はもう一人じゃない。プリキュアにはなれなかったけど、こうして支えてくれる仲間がいる。つぼみにとってはそれが何よりもうれしかった。

「ありがとうございます、えりか」

「何よ急に。褒めたって何も出ないよ」

「お礼を言いたいから言っただけです。それだけです」

「ふうん。なんだかよく分からないけど、どういたしまして」

「はいっ」

つぼみは自分に肩を貸し、少し頬を赤らめて答える自分の相棒を見て微笑んだ。

「こらー、ヒ口君！ るみちゃんをいじめちゃだめでしょ！ 女の子をいじめる悪い子は、”キュアマリンみたいになっちゃう”わよ」「あわわ……ごっつ、ごめんなさいノリコ先生、ごめんなさああい」「分かればいいのよ、分かれば」

「ええつと、これはその……どういふことなんですか」
戦いを終え、幼稚園へと戻ってきたつぼみが目の当たりにしたのは、

”キュアマリンみたいになる”という脅し文句を使って子どもを叱りつけるノリコ先生と、その言葉に本気で怯え、彼女の言うことにきちんと従う幼稚園児たちの姿だった。

キュアマリンの戦いぶりは、子どもたちにとって相当なトラウマなのだろう。

「なんなんですかこれはっ！ なんでこんなことになってるんです！」

「さ、さああー。あたしにも何が何だか」

「えりかのせいですつ。えりかが子どもたちに教育上よろしくないことをし続けたせい……」

「わー！ わーわーわー！ やめて、やめてったらコフレエー！」

「えりかつ！ あっ、あなたは……いたいけな子どもたちになんてことを」

「だあかあらあ！ 不可抗力なんだって！ あたしのせいじゃないっしゅー！」

「今日という今日は……！ 私、堪忍袋の緒が、切れましたッ！」

「ちよ、ちよちよっ、やめて！ ゆるして！ つぼみーっ！」

#4 もうダメです……えりかが砂漠の使徒になりました (前書き)

前回のあらすじ。

子どもたちの支持を得るべく、幼稚園の手伝いに行ったつぼみとえりか。

途中で砂漠の使徒も登場し、見事撃退したキュアマリンでしたが、支持を得るところか、忘れたくても忘れられない、一生のトラウマを残してしまうことになってしまったのでした。

4 もうダメです……えりかが砂漠の使徒になりました

青く輝く我らの星・地球。

その隣に寄り添うようにして存在し、太陽の光を借りて輝く衛星・月。

まだ人類が到達したことの無いその星の裏側に、秘密組織『砂漠の使徒』の前線基地があった。

月の裏側を改造して作られたその基地では、幹部たちと戦闘員・スナツキーたちが、人々の心を枯らし、地球全体をあらゆる意味で『砂漠化』すべく、日夜活動を続けている。

この日、砂漠の使徒幹部のクモジャキーとサソリーナは、彼らの司令官に呼び出され、三人掛けの古ぼけた簡素なソファだけが置かれた部屋に集められていた。

別礼がない限り作戦の立案・行動に於いて個々人の独断専行が許されている中での緊急招集だ。善い知らせであるとは到底思えない。二人はソファに腰を降ろし、不安げな表情を浮かべて司令官が来るのを待っていた。

程無くして、部屋に不気味な仮面を被った銀色長髪で背の高い男が入ってきた。彼こそが砂漠の使徒・地球支部の司令官、『サバーク博士』。

博士は二人の部下が自分に対し立ち上がって一礼したのを見計らい、休めと一言かけて座らせた。

「サソリーナにクモジャキー、砂漠の使徒の大幹部が二人揃ってしくじるとは大した失態だな。キュアムーンライトが姿を消し、プリキュアとの戦いがなくなつて体が鈍つたのかね？」

「体が鈍つた？ 馬鹿な、俺はキュアムーンライトがいようとイマイト、己に課した修練を怠つたことなど一度もないぜよ、サバーク

博士」

「事情が変わりましたのよおんサバーク博士。キュアムーンライトの後釜 が私たちの邪魔をしているのですわぁん」

話を聞くうち、サソリーナの弁解の中から『後釜』という単語を聞き取ったサバーク博士は、仮面の中で眉を潜めて言葉を返す。

「後釜、だと？ キュアムーンライトは寄る年波と、大学受験の試験勉強でプリキュアを引退したはずだ。親しい友人もほとんどいなかったと聞く。そんな環境で、一体誰が、プリキュアの後釜になれるというのだ」

「そんなこと、俺たちにわかるはずないき」

「存じ上げませんわぁん」

まあ当たり前かと、二人の問いに対し溜め息混じりに言葉を返すサバーク博士。

だが知らないと言え、そのまま放つて置くわけにも行かない。サバークは語気を荒くし、二人の部下にまくし立てる。

「分からないで終わらせるんじゃない。我らが砂漠の王・デューン様が、近々地球にお出でになるとの連絡が入った。それまでに砂漠化を完了させるまでとは言わんが、プリキュア相手に手も足も出ないと知れたらどうなると思う」

サバーク博士はそれ以上は何も言わず、右手の親指を立てて、自らの首の前でさつと引いた。

砂漠の王・デューンと言えは五十数年前、伝説のプリキュア『キュアフラワー』と戦い、彼女を戦闘不能に追い込んだ、砂漠の使徒という組織の事実上の支配者だ。

そんな人物を怒らせでもしたらどうなるか。分からない彼らではない。

サソリーナとクモジャキーは冷や汗を垂らし、怯えて生唾を飲み込んだ。

「とにかくだ、まずはプリキュアを始末しなくては話にならん。早

急に何か手を打たねばな。さて、どうしたものか……」

プリキュアの始末。無くした信頼の回復と溜まった鬱憤を晴らすのに、これ以上のものはない。

二人はすかさず立ち上がり、顎に指を乗せて思案する博士に向かい我先にと声を上げた。

「その任務、このサソリーナにお任せくださいあい、サバーク博士。完璧に遂行して見せますわぁん」

「前回こそ遅れを取ったが、もはや俺に遊びはないき。プリキュアの抹殺、このクモジャキーが見事成し遂げて見せるぜよ」

語気を強めて詰め寄る二人を見つめ、サバーク博士はどうするべきかと思案する。

そんな中出入口の扉から、腰どころか太股にまでかかりそうな程の青い長髪に、女性と見紛うほどに麗しく、端正な顔立ちの青年が部屋の中に足を踏み入れ、待つて下さいと声をかけ、三人の注意を自分に向けさせた。

「美しいほどに残酷なその任務。それ以上に美しいこのボクにこそ素晴らしい。そうは思いませんか？ サバーク博士」

「『コブラージャ』。あんだ、いつの間ここに」

「お前は博士から招集を受けていなかったはずだよ。今更何の用じやき」

コブラージャと呼ばれた青髪の青年は、嫌味たらしげに鼻を鳴らし、無意味にその場でぐるりと回った上で二人に言葉を返した。

「砂風呂エステ」を終えて部屋に戻ろうと廊下を歩いていたら、偶然君たち二人が博士に御叱りを受けて頂垂れている所を見かけてねえ。何かあるんじゃないかと思って来て見ただけさ。それはそうと」

二人の幹部に嫌味をぶつけたコブラージャは、嫌な顔をして自分を睨みつける二人のことなどお構いなしに、サバーク博士の前で片膝をついて頭を垂れた。

「デューン様を気持ちよく地球に迎え入れるためにも、プリキュア

の排除は早急かつ確実に行わなければなりません。無様にもプリキユアに敗れた二人なんかよりも、このボクの方が適任かと思うのですが、いかがでしょうサバーク博士」

「ちよつとコブラージャ、失礼にも程があるわぁん！」

「俺たちは負けたんじやないき。履き違えられては困るぜよ」

他の二人を押し退け貶め、自分の株を上げて任務を奪い取るうとするコブラージャに対し、声を荒げて反論するサソリーナとクモジャキー。

コブラージャはしたり顔で口を歪ませ「そんなつもりはない」と言葉を返すが、それで二人で納得するはずがない。

部屋の中に険悪な雰囲気が漂う中、サバーク博士はそれを掻き消すように、やめないかと三人を一喝した。

「お前たちの言い分は分かった。しからは今回の任務、お前に一任しよう。コブラージャ」

「ちよつ、ちよつと待つてくださいサバーク博士えん」

「このままじゃ引っ込みがつかんき。納得のいく理由を教えて欲しいぜよ」

二人は納得がいかないと、サバーク博士に尚も食い下がった。

サバーク博士は自分に詰め寄る二人を、手と冷たい視線で引き剥がした上で答える。

「私の与えられた任務を仕損じた。それは変えようのない事実だろう？ これはその”罰”だ。二人揃って謹慎でもしているがいい。

それが今回お前たちに与える『任務』だ。復唱の要なし。分かったらどこへでも行け」

これ以上の問答は無用どころか、自分たちの立場すら危うくしてしまうだろう。

そのことを理解したサソリーナとクモジャキーは、煮え切らない表情のまま借りてきた犬のように頂垂れ、黙って部屋を出て行った。

「それでは任せたぞ。方法はお前の好きにするがいい。手早くな」

「かしこまりました。手早くそして、美しく」
コブラージャはしたり顔で口元を歪ませ、今一度サバーク博士に頭を垂れた。

砂漠の使徒が本格的にプリキュアを排除しようとして動き出した中、彼らと唯一対抗できる存在であるキュアマリン……来海えりかはと
いうと。

「うししし。さあて、ここに取り出しますは何の変哲もないただの食用こんにやく。こいつを制服越しにつぼみの背中に投げ入れてつめたーいだの気持ち悪いだの取って取ってだのと、恥じらう姿を思う様激写してやるっしゅ」

親友・花咲つぼみに嫌がらせを仕掛けようと、眠い目をこすりつつ、校門の扉の前で近所のスーパーで購入した福島県産徳用こんにやくの封を開けていた。

時刻は一時限目前のホームルームが始まる少し前。花咲つぼみはファッシュions部と兼部しているガーデニング部の活動で、早くから学校で花壇に水をやっていた。

生真面目で早起き癖のついたつぼみはともかく、日々ぐうたらと過ごし遅刻の常習犯のえりかにとって、この早さは驚異的。

これも全て、歪んだ友情の成せる業なのか。

つぼみはガーデニング部の部員たちと共に、花壇の前で話し込んでいる。

えりかは封を破ったこんにやくを指でつまんで持ち、校舎の裏に隠れて様子を伺い、つぼみが一人になるのを今か今かと待った。

これを背中に投げ入れたらどんな声を上げるか、どんな反応をするだろうかと笑みを浮かべていたが、花壇の前で花に水を上げるつ

ぼみは、えりかにとって信じられないことを口にした。

「やっぱり…… 処分 するしかなさそうですね、 『えりか』」

このまま放って置いても邪魔になるだけですし。

先輩たちから 芝刈り を借りてこなくちゃ。あのー、すみませーん。実はですね……。

「しよ、しよしよしよ、処分!？」

来海えりかは耳を疑った。親友（と思っているのはえりかだけなのかもしれないが）である自分を、自分のいない所で”処分”しようなどと口にするとは、つぼみの性格からしてとても信じられることではない。

反面、そうなるには仕方がないと納得もできた。不可抗力ではあるが本来プリキュアになるはずだったつぼみからその資格を奪い、その上自分の都合ばかりを優先させてプリキュアとしての職務にはほとんど興味を示さない。彼女の堪忍袋の緒もとうとう限界なのだろう。

「いや、でも、その。それにしたっておかしいでしょ。処分、処分って何よ。あたし、そこまでのことやった？ プリキュアとして砂漠の使徒を倒しているのはあたしなんだよ？ 処分される筋合いはないっての」

動揺と同時に、沸々と怒りが湧いてきた。えりかはいっそプリキュアに変身して返り討ちにしてやるうかと思っただが、つぼみという人間のことを思い返して身震いを一つ。

花咲つぼみは幼少の頃から元プリキュアであった祖母の元で修業を重ねてきた努力家であり、どこにでもいる普通の”美”少女である自分とは格闘センスがけた違い。

その上、複雑骨折治療の際に受けた局部麻酔の影響か、痛覚麻痺で痛みに滅法強く、その際筋肉の下に骨を覆うようにして入ったチタン製の補強用ボルトのせいもあってか、正拳突きで電柱や鉄の扉

にヒビを入れられると聞いたことがある。もはや人間業ではない。自分一人で砂漠の使徒と戦ってもらいたい程だ。

プリキュアに変身して戦ったとしても勝てるかどうか……。

「えりかー、えりかー。ここにいたですか？」

「うわをう！ あ、ああ、なんだコフレかあ。脅かさないでよお」

「早起きなんかしてどうしたんです？ いつも時間にベッドの中にいないから街中探したんですよ」

一人で怯えて取り乱すえりかに声をかけたのは、お供の妖精コフレだった。

いつものようにえりかを起こそうとベッドに手をかけたところ、彼女の姿がそこになかったことを不審に思ったらしい。

それは兎も角好都合だ。えりかはふわふわと宙に浮くコフレの首根っこを掴み、目を血走らせてまくし立てた。

「そんなことはどーだっていいから、あれ出してあれ！ ええつとあの……そうだ、子種！」

「おっ、落ち着くですえりか！ それだと意味が全然違っちゃうですっ！」

「この際どうでもいいよ、それよりも早く早く！」

普段はデザトリアンを前にしても尚渋るというのに、思い切り取り乱して変身させると嘆願するこの態度。

コフレは求めに応じてこの種の種をえりかに渡し、何があったかと問い掛けた。

「こんな朝からデザトリアンが出たですか？ えりかが取り乱すぐらいってことは相当の」

「ある意味デザトリアンよりも強敵かもね。とにかくサンキュー、コフレ」

プリキュア！ オープンマイハート！

青色のこころの種をココロパフォームに装填し身体中に吹き掛け、キュアマリンに変身したえりかは、拳を握って気合いを込める。

しかしそれと同時に彼女は考える。

たとえプリキュアに変身したとして、正拳突きで電柱や鉄の扉にヒビを入れるような相手に果たして勝てるのだろうか。

目を閉じてその場면을想像してみる。何度やり直してシミュレートしても、自分が返り討ちに遭う未来しか弾き出されない。

堪忍袋の緒が切れたつぼみの実力は未知数だ。勝てる気がしない。怖さのあまり握った拳に汗が溜まり始めた。これはまずい。非常にまずい。

キュアマリンは目を見開くと同時にガーデニング部の花壇に背を向けた。

「ちょっと、どこに行くんですかマリナー！ 学校始まるですよー

！」

「適当に考えといてー！ そんなじゃ」

「てきとうって、結局何なんですかー！？ ちょっと、ちょっとお

ー

コフレの呼び止めにも応じず、マリナーは詳しいことを一切伝えな
いまま、脇目も振らずに走り去ってしまった。

時を同じくし、サバーク博士よりプリキュア抹殺の命を受けた砂漠の使徒の大幹部・コブラージャは、戦闘員スナッキーを複数引き連れ、希望が丘の駅前ロータリーへと足を運んでいた。

何が気に召さないのか、コブラージャは青筋が立つほどの怒り顔で辺りを見回しては、取り巻きのスナッキーたちに殴る蹴るの暴行を加えている。

このまま殴られっぱなしではたまらない。スナッキーの一人が「何故そんなにお怒りなのですか」と問う。常人にはキーキーと猿のような鳴き声を立てているようにしか聞こえないが、砂漠の使徒には言葉として理解できているらしい。

コブラージャはその程度の機微も理解できないのか、と鼻を鳴ら

してその質問に答える。

「そんなもの決まっているだろう。ボクは世界で一番、いいや宇宙で一番美しい存在のはずだ。なのにこれはなんだ。何故誰も寄って来ない。何故ボクの美しさになびかない！ こんなことがあっていいはずがない！ そうだろう！？」

怒りの理由を問うたスナツキーは心の中で「またそれか」と溜め息を吐き、通勤ラッシュのピークを過ぎたこの時間帯では、それも仕方のないことではないでしょうか。と言葉を返した。

しかし、コブラージャは納得がいかないと言わんばかりに、スナツキーの頭に拳骨を叩き込んだ。

「そんなことは分かっている！ だからこそ、ボクは声を大にして言っているんだよ！ 通勤ラッシュのピーク？ 人の行き交いが少ない時間帯だあ？ そんなものは言い訳にすらならない！ 何故ならボクはツ、誰よりも美しいからツ！」

(どこにカメラがあるのか知らないが)キメ角度の斜め45度を取り、歯の浮くような台詞を並べ立てるコブラージャ。スナツキーたちはよくそこまで自分に自信が持てるなど目を細めて呆れのため息を漏らした。

「馬鹿者共、何をしている。誰もいないならお前たちのやることは一つだろう」

と言われても、スナツキーたちには何をすべきか分からない。

自分たちにもどうしろと言うのだと誰もが首を傾げる中、コブラージャは一番前に立っていたスナツキーの尻を蹴り付けた。

「鈍感にも程があるぞ貴様らツ、ここに人を集めろということに決まっているだろう！ ボクの美しさを知らないまま生きているなんて罪だ、罰だ、ああいや万死に値する！ さっさと連れてくるんだ！」

一体何を考えているんだ。そんな無茶苦茶な。そんな集め方をした人々に讚美されて嬉しいのか？ スナツキーたちの中でひそひそ話が飛び交うが、コブラージャはそれらを一喝し、さっさと行けと

平手を振った。

眉間に皺を寄せてスナツキーたちに指示を飛ばすコブラー ज्या。しかし彼はスナツキーたちを動かすのに夢中になるあまり、自分の背後に対する警戒をおろそかにしていた。

どいてどいて、どいてーッ！

それは大きな過ちであり、コブラー ज्या痛恨のミスでもあった。背後への警戒を怠ったあまり、自分に向かって何者が突っ込んで来ていること気付かず突き飛ばされ、美しい放物線を描いて吹き飛び、駅前の『燃えないゴミ』の収集箱の中に顔を突っ込んでしまうことと相成ったのだ。

「あああ、ごめんなさい。まさかこんな時間に駅前に人がいるとは思わなくて、坂を思いっきり走ってたら止まれなくなっちゃって

ー」

「ぼ、ボクの美しい顔が……ポリエステルやビニールまみれ！ 許さん、許さんぞ！ どこのどいつだ、誰がやった！」

今まで以上に眉間に皺を寄せ、血管が浮き出て見えるほどに目を血走らせて、声のする方に顔を向けるコブラー ज्या。

しかし悪いと思つて彼に頭を下げていたのは、意外な人物だった。

「え、何？ そんな親の仇を見るような目で見られたら、あたし……」

…

コブラー ज्याが驚かないはずがない。彼の目の前で頭を下げているのは、抹殺のターゲットなるキュアマリンその人なのだから。

「ふふ、ふはーっはっはっは！ まさかそっちからのこのこやつてくるとはッ！ 飛んで火に入る夏の虫とはまさにこのこと！ キュ

アマリン、貴様の命！ 砂漠の使徒の大幹部・コブラー ज्या様が貰い受けるッ」

「えっ、マジ？ マジであんた砂漠の使徒なのお！？ っていうかこんの面倒な時に何出て来てんのよお！ あたしは忙しいの、抹殺なら後にしてくれないかなあ！」

逃げるので忙しいというのに何なんだと、顔を引きつらせ怒りを露にするキュアマリン。

そんなこと知るかとコブラー ज्याを押し退けその場から去ろうとするが、彼配下のスナツキーたちがマリンを取り囲んだ。

「後にくれと言われてはいそうですかと行くわけがないだろう。仇敵プリキュア、美しいボクの腕の中で、美しく散るがいいッ」

これはまずい、非常にまずい。この雑兵共がどうこうという問題ではない。

プリキュアである自分が砂漠の使徒と戦えば、花咲つぼみは間違いないく、それを嗅ぎつけここにやってくるだろう。砂漠の使徒を撃退するついでに自分を処分する……なんてこともあり得なくはない。プリティでキュアキュアな超戦士な自分は状況をどう切り抜けるべきか。キュアマリンは腕を組んで目を閉じ思案する。

そんな中彼女はあることに気付く。自分を取り囲むこいつらは何だ。砂漠の使徒の戦闘員か。それにしてもなんて数だ。自分一人にこの数は多すぎなのではないか。

いや、ちょっと待ってよ。この数、この数！ いいじゃん、すごくいいじゃん！

つぼみは格闘技の達人であたしよりもずっと強いけど、この数を相手にすればさすがのつぼみだって……。

ふふふ。ふふふのふ。

キュアマリンは目を見開いて振り向くと、凜とした表情でコブラー ज्याの前まで歩み寄り、彼の目の前で膝をつき手をつき頭を下げた。

「あたしの負けっしゅ！ どうか、どーか部下に加えてつかあさい、ブラジャー様」

「ブラジャー！？ いや、それよりもどういうつもりだ、それはッ」

「どうもこうもそうもないっしゅ。あたしの力じゃ砂漠の使徒になんて勝てっこないし、馬鹿やって派手に散るよりも、部下になった方が楽しそうだし、ねっ、ねっ！？」

あまりにも予想外の展開にコブラーじヤは思わず己の耳を疑った。しかし彼は同時にこうも考える。

確かに彼女の言う通りだ。自分たちの対の存在であるプリキュア。倒すべき相手であることは間違いない。しかし、そんな相手が自ら部下になりたいと言って来ている。これはむしろチャンスなのではないかと。

コブラーじヤは得意げな表情を顔に浮かべ、頭を下げ続けるマリ
ンに顔を上げると促した。

「えっ、何？ 仲間にしてくれるの？」

「貴様、何を企んでいる。何が望みだ」

「嘘をつくな。理由もなしにプリキュアが寝返るものか。言え、目的は何だ。何なのだ」

マリンは少し困ったような顔を見せ、いたずらっぽく笑って言葉を返す。

「“世界一”美しいブラジャー様に惚れ込んで……ってのは、ダメかなっ」

先の会話の中でコブラーじヤが自画自賛していることを思い出し、彼の手を握り笑顔を浮かべて言い寄るマリ
ン。

コブラーじヤはマリンの手を握り返すと、その通りだと言って高
笑いを一つした。

「そうだ、そうだとも。ボクは美しい、この世の誰よりもな！ な
かなか見込みがありそうじゃないか。いいだろう、ボク直属の部下
として働くことを許可する」

「マジすか！？ きゃっほー、ありがとう超絶美しいブラジャー様」
「許可はするが、ボクの名前はブラジャーではない、コブラーじヤ
だ。上司の名前ぐらいきちんと覚えろっ」

これは落ちたなどと、マリンはコブラーじヤから見えない角度で目
を細めて口元を歪ませた。

その上で笑顔を作って振り返り、手を揉んで腰の低さをアピール
しつつ話を切り出す。

「ところでそのお、コブラジャー様。襲いたいところがあるんですけどお」

「何だ、早速仕事か？ 熱心で結構結構。して、襲いたいところは何だ」

「あそこですうコブラジャー様あ」

うしししし、と下品な笑いを上げつつ、マリンは岡の上にある”私立明堂院学園”に向けて右手の人差し指を突き立てた。

「ホームルームの時間になっても来ないなんて、えりか……今日は一体どうしたんでしょう」

私立・明堂院学園中等部2年B組。

花咲つぼみは窓際最後列の席に座り、担任の鶴崎先生のホーム・ルームにおけるお小言を聞き流しつつ、窓の外をぼおっと見つめていた。

遅刻は頻繁にするものの、欠席は滅多にしないえりかだ。何かあったのではないかと嫌な予感が頭をよぎる。しかしそれも、校門を破ってガーデニング部の花壇に押し入るスナッキーたちの姿を見るまでだった。

「なっ、なんなんですかあれはッ」

「どうしたんだ花咲ー、下ばかり見て。えりかでも見つけたかー？」

「えっ、あっ、ええと……」

鶴崎の問いかけに、つぼみは上手く言葉を継げずどもってしまふ。一大事であるが、彼女たちにそれを告げたとしてもいたずらに混乱させてしまうだけだ。

つぼみは悩みに悩んだ末、左手を押さえつつ立ち上がり、鶴崎に頭を下げてこう言った。

「すみません先生、左手に埋め込んだボルトから出血してしまったので、保健室に行つてきます」

「しゅ、出血！？ 大丈夫か花咲！ なんなら救急車を」

「いえ、保健室で十分ですから。ではッ」

本当にそれでいいのかと心配する鶴崎の言葉を無視し、つぼみは左手を押さえて足早に教室を出て行った。

取るものも取らずに、早足で現場に駆け付けたつぼみが見たものは、悪びれることなく花壇を踏み荒らすスナツキーの一団と、彼らに襲われて力なく横たわるコフレの姿であった。

直ぐ様コフレを抱き抱えたつぼみは、患部を優しく摩りつつ大丈夫ですかと声をかける。

「砂漠の使徒……いや、マリンが、マリンがあ……」

「マリン？ マリンの身に何かあったのですか？」

つぼみがどうしたんだと聞くより早く気を失ってしまうコフレ。

えりかの身に何があったかとコフレの体を激しく揺する彼女の前に、スナツキーたちを掻き分けて何者かが姿を見せた。

「あーっはっはっは！ 誘いに乗ってまんまと現れたわねつぼ

みい！ あんたの命は砂漠の使徒ブラブラジャー様一の子分、来海

えり…… ああいや、エーリカ・えりイカ 様が頂戴するっしゅ！」

「は……あ？」

これにはつぼみも絶句する他なかった。目の前に立っているのは誰だ。コスチュームの白い部分を墨汁か何かで黒く塗り潰し、目が隠れる程度の仮面をつけてはいるが、その声その姿は紛れもなくキユアマリンその人だ。

それが何故、砂漠の使徒の部下となり、子分たちと共に花壇を踏み荒らしているというのか。

「タチの悪い冗談はやめてください。そこはガーデニング部の皆さんが手塩にかけて育てた花壇なんですよ」

「これが冗談言ってる顔に見える？ あたしは本気よ、マジ本気！ 処分なんかされてたまるもんですか。あんたがその気だっつてんなら、そうなる前にあたしがけちよんけちよんにしてやるっしゅ」

「処分つて……、一体何のことですか！ わけがわかりません！」
つぼみは覚えがないと身振り手振りで弁解するが、マリンは何を言うかと人差し指を彼女の顔に突き立てた。

「うるさい、うるさい！ 兎に角、今日という今日は年貢の納め時よつぼみ！ スナツキーたち、やっちゃってー！」

マリンの声に従い、猿のような鳴き声を上げてつぼみに飛びかかるスナツキーの一団。

訳が分からないが、とりあえず逃げられないことだけ理解したつぼみは、襲い来るスナツキーたちを蹴り飛ばして引き剥がすと、制服を脱ぎ捨て、プリキュアの衣装に着替えて大見得を切った。

「何が何だか存じませんが、来ると言うなら拒みはしません。スナツキー共、かかってきなさい！」

威勢のいい声で平手を構え、スナツキーたちを迎え撃たんとするつぼみ。

いくら強いと言えど、この数の前では成す術もないだろう。

そう考え含み笑いを浮かべるマリンだったが、実際に彼女の目に映った光景は、一団全てをたった一人で叩きのめし、平気な顔をして立っているつぼみの姿であった。

「スナツキーは全て片付けました。マリン……、いいえ、エーリカ・えりイカ。次はあなたの番です！」

朱色の長い髪を翻し、マリンに人差し指を突き立てるつぼみ。

疲れた様子など微塵も見せず、失望と怒りに満ちた目でこちらを見つめている。今更謝った所で無駄である。

これはまずい。実にまずい。恐怖に駆られて後ずさるマリンの鳩尾に、一瞬で間を詰めたつぼみの右拳が深々と突きささった。

「うをおっ……強烈ッ、まじで強烈う……」

「プリキュアでなくとも、砂漠の使徒を倒すのが私の務め。それがたとえ、元・プリキュアだったとしても！」

つぼみの猛攻は止まらない。鳩尾を叩かれてくの字に折れたマリンの顎に、アッパーカットを入れて浮き上がらせ、浮き上がった顔

に右足の回し蹴りを見舞って蹴り飛ばし、マリリンが起き上がるうとする所を狙い両の拳の連打、連打、連打。

マリリンは反撃する暇すら与えられず、力なく仰向けに倒れ込んでしまう。

その上でつぼみはマリリンの上に馬乗りをし、彼女の顔にさらに拳を叩き込んで行く。

「ちょ、ちょちょ！ タンマ、まじでタンマ！ やめて、やめて、とめて！」

「プリキュアでありながら、砂漠の使徒に魂を売った相手のことなんて知りません！」

「いやそらそうだけど、あたしヤバいから！ 死んじゃうから！」

「聞きたくありません、聞きたくもありません！」

マリリンの制止をことごとく無視し、その代わり彼女の顔に両の拳を浴びせるつぼみ。

骨折固定用ボルトに包まれたつぼみの拳は、仮にもプリキュアの力に加護されているマリリンの顔を、あつという間に真っ赤に腫らしていた。

このままでは本当にどうにかなってしまう。マリリンは無視されようが断られようが、それでもなお必死にやめてほしいとつぼみに嘆願し続けた。

そんな中マリリンは、殴られ続ける自分の頬に、滴のようなものが垂れて来ていることに気づく。

なんだこれとは改めてつぼみの顔を見込む。自分に負けず劣らず赤い顔をしており、跡がつくほど涙を流して鼻水をすすっていた。

「なんで……なんで、砂漠の使徒なんかの部下になっちゃうんですか……。私たち、二人で一人のプリキュアだって、友達だって言うてくれたじゃないですか……。それが、なんで……」

花咲つぼみは泣いていた。いくら敵側に回ったとはいえ、大切な友達と戦ってまともでいられるわけがなかったのだ。

つぼみの拳の重さは、それ即ち彼女の悲しみそのもの。プリキュ

アにも効いて当然なのだ。

だからこそマリンは疑問に思う。そこまで自分のことを考えてくれている人間が、どうして”処分”なんてことを思い立ったのか。おかしい、おかしいぞ。

浮かんだ疑問は瞬く間に彼女の頭の中で膨張し、口を突いて漏れ出した。

「何よ、何勝手なこと言ってくれちゃってんのさつぼみ！ そーゆーこと言う人が、なんであたしを”処分”しようだなんて言うわけ！？」

「しょ、処分！？ 誰がいつ、そんな物騒なことを言ったんですか！」

「誰も何もアンタでしょあんた！ 今日の朝、花壇の前で！ 忘れた、とは言わせないよ！」

「いや、だから。そんなこと一言も言ってますよ。マリンこそ、何の話をしているんです」

話が全く噛み合わない。自分は元より、つぼみも嘘をついている風には見えない。これは一体どういうことなのか。

マリンがこの矛盾に頭を抱えている中、つぼみは何かを思い出したようにぼんと手を叩いた。

「そういえば。マリン、あなたさっき今朝の”花壇の前”で、処分って言葉を聞いたと、そう言っていましたよね」

「そうよ。それが何だったのよ」
「それってもしかして。あの”花”のことだったんじゃないですか？」

「花ア？ 一体何のことよ」
「ほら、あれです。花壇の端っこにある……」

どついうことだと首を傾げるマリンに対し、つぼみはまだ踏み荒らされていない、花壇の端っこを見る様促す。

そこでは、今にも萎れそうなほど弱った、筒のような形をした白い花がちよこんと咲いている。

しかし、これだけ見せられてもマリンには何が何だか分からない。「あれが何だつて言うのよ」

「あの花の名前は”エリカ・ホワイトデイルイト。手違いで日陰に植えてしまったので、移し替えをしたかったんですけど、もうどこにもスペースがなくて……。このまま萎れさせてしまふくらいなら、つてことで”処分”しよう、みたいな話なら、確かにあの時していいましたけど……」

「は……花の話い!？」

花咲つぼみが”処分”しようと考えていたのは、自分ではなく、自分と同じ名前の”花”。

予想の斜め上に行く展開に、マリンは思わず目を点にし、大口を開いて仰天してしまった。

そして同時にこうも考える。

つまり、何？ あたしは花と自分の名前を勘違いしてて、たつたそれだけのことでつぼみを裏切つて砂漠の使徒側についちゃつたつてこと？

何よそれ。馬鹿以外の何物でもないじゃん！ アホすぎるにも程があるじゃんあたし！

どおしよ、どうしよう……。あたしの勘違いでつぼみにマジ泣きされちゃつたよお、つぼみに殴り殺されちゃうよお……。

傍から見ると馬鹿らしい話だが、彼女自身にとっては切実な問題だ。

こんな馬鹿馬鹿しい理由で、倒すべき相手の部下になつた上、つぼみが大事に育てていた花壇を踏み荒らしてしまったのだ。いたずらで許されるようなことではない。

やつてしまったものは仕方がない。マリンはこの行為をどう誤魔化すべきか、冷や汗を垂らして思案を巡らせる。

考えども考えども妙案は浮かばない。万事休すかと目を伏せたマリンの耳に、キザで嫌味たらしい青年の声が届いた。

「何をしているエーリカ・えりイカ！ ただの民間人ごときに遅れを取るとは、美しくないぞッ！ 貴様それでもボクの部下か！」

声の主は、マリンド直属の上司・コブラージャ。

自ら襲撃する場所を指定しておきながら、マリンドがいつまでたっても戻って来ないことに、業を煮やして見に来たのだろう。

コブラージャはマリンドの上で馬乗りになるつぼみを引き剥がすと、マリンドの前髪を掴んで持ち上げ、自分の顔の方へと引き寄せた。

「お前がここを襲いたいと言ったから任せたのに、このザマはなんだ！ 貸し与えたスナツキーたちがみんな倒されているじゃあないか！ ワケはともかく理由を言えッ！ どういうことだ」

握った前髪を上下に激しく振り、マリンドに対し激しい追及を行うコブラージャ。

しかしどうしたことだろう。痛みを伴う程激しい追及を受けているのにも関わらず、マリンドは口元を歪ませ、不気味に笑い始めたのだ。

何がおかしいと、握り手に力を込めるコブラージャに対し、マリンドは両手にエネルギーを集めて、彼の腹部に叩きつけた。

マリンドは、吹き飛ばされて壁に激突するコブラージャを睨みつけると、被っていた仮面を外して放り投げ、コスチュームに塗りたくった墨汁を落とし、彼に向けて人差し指をびしっと突き立てた。

「ふふ、ふふふのふ。まんまとハマったわねブラブラジャー。あたしの”幹部誘き寄せ大作戦”に！」

「誘き寄せ…… 大作戦！？ どういうことだ、エーリカ・えりイカ！」

「そうですマリンド、作戦って…… 一体」

「えっ！？ ああ、うん…… それは」

そんなもの、自分にだって分かるものか言いたかったが、彼らを前にしてそんなことが言えるはずがない。

マリンドは目線を忙しなく動かしつつ、どもりながら答えた。

「こそ、そうよ！ 全部あたしの作戦どーりだったのさ！ ちまち

まデザトリアンを狩ってるだけじゃあ、いつまでたっても戦いは終わらないかね、仲間になるってうそぶいて、幹部のあんたを引きずりだそうって考えたのさ！」

「なんだと……！ 全部お前の、計算通りだったっていつのかッ？」

騙され乗せられ、拳句部下を無駄にしてしまったことに悔しがり、憤慨して地団駄を踏むコブラージャ。

マリンはそんな彼を尻目に、コブラージャに蹴飛ばされてうずくまるつぼみに肩を貸して起き上がらせた。

「つぼみ、大丈夫？ ごめんね、すぐに言いだせなくて……」

「平気です。そんなことより、マリンの立てた作戦に気付けなかっただなんて……私はプリキュア失格ですね」

「いいっていいって。そんなことはさ」

”むしろ謝りたいのはこっちの方だ”という言葉を喉元でなんとか押し留め、つぼみから見えない角度で小さくガッツポーズをするマリン。

その上でつぼみの隣に立ち、それよりもコブラージャの方を指差した。

「まずはあいつを倒さなきゃでしょ。一緒に行くよ、つぼみ！」

「そう……ですね！ やりましょう、マリン！」

互いに頷き、地団駄を踏むコブラージャに向かって走り出すマリンとつぼみ。

コブラージャの方もそれに気付き、身構えようとするが、彼が両手を十字に組むよりも早く、二人の少女の鉄拳がコブラージャの腹筋を貫き、彼の体をくの字に折った。

「マリンを利用して花壇を踏み荒らすなんて……私、堪忍袋の緒が切れました！ 覚悟しなさい、砂漠の使徒幹部・ブラブラジャー！」

「誰がブラブラジャーだ！ ボクの名前はコブラージャ……」

弁解など一切聞かず、体勢を立て直そうとするコブラージャの左の頬に、体重の乗ったつぼみの鉄拳が入る。

その反動で右側に捻じれたコブラー ज्याの体に、右側に立つマリンの回し蹴りが決まる。コブラー ज्याの体が空中で2、3度回転し、受け身を取ることもままならず、地面に叩きつけられた。

「おのれ……！ 舐めるなよプリキュアあー！」
不意打ちだのまぐれだのと自分に言い聞かせ、起き上がってプリキュアに向かい来るコブラー ज्या。

まだやるかと拳を握るマリンに対し、つぼみは手出し無用と言って彼女の前に立った。

「ボクの美しき一撃を喰らって沈めエ、プリキュアああッ」
「それは無理です」

勢い任せに殴りかかるコブラー ज्याの拳を見切り、首の動きだけでそれをかわすと、つぼみはすれ違い様に自分の拳を正面から勢いよく叩き込んだ。

コブラー ज्याは防御することすら出来ずに、その一撃をまともに喰らい、コンクリートの壁をハンマーで叩いたような音と、多量の鼻血を散らせて仰向けに倒れ込んでしまう。

みっともなく鼻血を垂らし、信じられない、そんな馬鹿なと呟いたまま立ち上がるうとしないコブラー ज्याを眼下にし、つぼみは背後に立つマリンに今です、と叫ぶ。

マリンは、つぼみの一撃で立ち上がることをそのままならないコブラー ज्याに同情しつつ、マリンタクトを呼び出して構えた。

「あんたにゃ恨みもないし、むしろ同情するけど……これでトドメよ！」

プリキュア！ ストレンジスラッシュ！

マリンタクトの先にエネルギーを集め、大の字になって起き上がれないコブラー ज्याを斬り裂こうと飛び掛かるマリン。

こんなところで倒されてたまるかと奮起したコブラー ज्याは、花壇の土を握りしめてマリンの顔に放った。

「ちよっ、何これ！？ 何も見えないッ！」

砂の目潰しを食らい、軌道の狂ったタクトの刃は、コブラー ज्या

に当たることなく、花壇を囲う煉瓦に突き刺さる。

必死になってタクトを引き抜こうとするマリンを尻目に、起き上がって体勢を立て直したコブラージャは、鼻の頭を押さえつつマリんに人差し指を突き立てた。

「キュアマリン……、それに暴力コスプレ少女！ 貴様らの顔は覚えてぞ。いつか必ず復讐してやる！ もう一度言う！ 必ず、復讐してやるからな！ 覚えている！」

捨て台詞を吐くだけ吐いたコブラージャは、マリンたちの目にも止まらぬ速さで、何処へと消え去った。

彼が如何にして、どこへと消えたのか。今の彼女たちにはさっぱり分からない。

コブラージャが逃げたのを見届け、一気に緊張の糸が切れたのか、マリンは大きく息を吐いて変身を解き、その場に座り込んでしまう。つぼみは、えりかが地面に倒れ込む前に、彼女を抱き止め引き寄せた。

「大丈夫ですか？ えりか……」

「へーきよ平気。なんともないって。それよりも……、さ。ごめんね、つぼみ」

「どうしてえりかが謝るんです？ 謝りたいのは私の方だというのに」

「いや、だから。いって言うてるじゃん。っていつか謝らないでよ、もう！」

えりかのおかしな態度に首を傾げつつも、彼女が無事なことを喜び、つぼみは安堵の溜め息を漏らした。

「さあてと。一時間目も始まつちやったし、教室に行かなくちゃ。ホントはあんまり行きたくないけど……」

「それはちよつ、……やめておいた方がいいんじゃない？」

「ええーっ。どうしてよ？ 何かまずいことでもあるの？」

こんなことがあってもなお、登校すると言っているのにも関わら

ず、それはやめた方がいいと、えりかを止めようとするつぼみ。

どうしてそうなるんだと問うえりかに対し、つぼみは怯えた目で彼女の顔を見て、何かを伝えようとするが、喉元でそれを飲み込み、なんでもありませんと背を向けた。

「ちよ、ちよっと、何よ今の思わせぶりな顔は！ あたしの何が問題だつてのよ」

「い、いいえ……別に何も。ささ、早く保健室に行きましょう」

「その驚き様。保健室より病院の方がいいんじゃないの？ ねえ、ねえっ！？」

自分でやったこともあり、つぼみにはとても言い出せなかった。

熟れた林檎のように頬を腫らし、パンダの顔の黒い模様のように、目元に大きく青胆を浮かべたみつともない姿ともなれば……。

「あのさあーつぼみ。あんたさっき言ったよねえ。あたしに”謝りたいって”」

「ええ、言いました。あの時は本当に申し訳ないことを……」

「だったら何よ！ なんなのよ！ なんてあたしが、花壇の片づけをやらなきゃいけないわけ！？」

その日の放課後。

つぼみの口添えで、結局教室へは行かずに保健室に行き、顔の治療を受けたえりかは（異常とも言えるほど滅茶苦茶に腫らしていたため、説明するだけで大変苦労したと言う）、つぼみの監視下の中で、自らが徒党を組んで荒らしたガーデニング部の花壇の片付けをさせられていた。敵であるスナッキーたちの力を借りることなどできるはずもなく、えりか一人での作業のため、下校時刻を当に過ぎ、夕暮れ時を過ぎても尚、片付けは遅々として進まなかった。

えりかはどうしてこうなったんだとぼやき、周りの物に当たり散

さすが、つぼみに「自業自得です」と指摘されて押し黙る。

真実を教えたわけではないし、結果的に作戦であったと納得されたのだが、それで花壇を踏み荒らした事実が消えるわけではない。

贖罪を兼ねて仕方なく、えりかは腫らした顔で、片付けを行っていると言っわけだ。時々通る人の目が、くすくすという笑い声が、鋭い棘となつて、彼女の心に突き刺さつて行く。

そんな中、えりかの目に一輪の花が留まる。今回の騒動の発端となつた白い花”エリカ・デイト”だ。

こいつのせいで酷い目に遭つたのかと、えりかは花壇の隅っこにちよこんと咲くそれを、憎らしげに見つめた。

「どうしたんですかえりか。もしかして、その花が気に入ったんですか？」

「まさか。あたしはこいつのせいで……」

「こいつのせい？ それは一体どういう」

「ああ、いや！ いやいや！ ないない、それはない」

「そんなこと言わないでくださいよー。やってみるとすごく楽しいんですから。ああそうだ！ これを機にえりかも……」

「いい！ もういい！ お花は当分こりこりーッ！」

片付けを放り出して逃げ出すえりかに、それを追って駆け出すつぼみ。

白から桃色に変わり始めた、エリカ・デイトの花は、そんな彼女たちを見て笑うかのように、風に吹かれて、穏やかに揺れていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5544q/>

ぐうたら魔法少女伝説来海えりかちゃん

2011年10月6日22時25分発行